

Tangolandia

秋
2013

日本タンゴ・アカデミー会報



目次

「悲しいこと」も「嬉しいこと」も	島崎長次郎	2
わたしのひそかに愛するタンゴ La que murió en París	高場将美	3
東京タンゴ・スポット回想 (第3回) “カンデラリア”	米山瑛子・島崎長次郎	7
想い出のタンゴ喫茶巡り (第8回) “アンサンブル” (盛岡)	関村幸治	10
私の愛聴盤 (第4回)	水野 中	14
アルゼンチン・タンゴのもう一つの楽しみ	松林隆道	18
私を魅了したタンゴダンス・イン・シネマ	鈴木啓子	22
映画 “タンゴ・リブレ” を観て	佐藤 進	26
タンゴを上手に踊りたい	池永博威	27
タンゴスポット発見! カフェ・レストラン “ジューラ・ジューラ”	西川 薫	31
小雨 (?) 降る径・考	石川正幸	32
チャカリータ墓参の旅	笠井正史	35
タンゴの歌詞を楽しむ会に参加して (4/29)	大澤 寛	38
河内&平田デュオを聴いて (6/8)	脇田富水彦	40
第10回タンゴダンス アジア選手権を観て (6/23)	齋藤富士郎・大澤 寛	41
ピアノラ・フェレルの最高傑作が蘇る: 小松亮太 “Bs As のマリア” (6/29)	吉村俊司	43
交流80周年アルゼンチンの集いに参加して (6/30)	中村尚文	45
いたばしハーモニカタンゴ祭りを聴いて (7/14)	大澤 寛	46
上野の森に響く ユリ・アセナの歌声 (7/18)	弓田綾子	48
第16回東京バンドネオン倶楽部演奏会を聴いて (9/16)	佐藤 進	50
なごや蓄音機クラブ発足 (9/28)	宮本政樹	52
新・訳詞コーナー No hay otro Carlos Gardel	大澤 寛	55

「悲しいこと」も「嬉しいこと」も

会長 島崎 長次郎

残念ながら今回は悲しいことからお話ししなければなりません。藤沢嵐子さんが8月22日に亡くなられました。われわれは8月28日の報道で初めて知ったのですが、タンゴの世界からまた一つ大きな星が消えました。享年88歳。この7月に米寿を迎えられたばかりだったそうです。言うまでもありません。夫君の早川真平氏とともに昭和のタンゴを大きく盛り上げ、同時に“日・垂のタンゴの掛け橋”として八面六臂の活躍をされた方だけに、惜しみても余りあることと言わなくてはなりません。心からの哀悼の意を捧げご冥福を祈るばかりです。

次に心にかかるのはTanguendo en Japón 誌最近号（第32号）で海江田禎二会員からも指摘があったとおり、収集家が遺された膨大なレコードなどのコレクションの行方です。当会会員の中には、なんとかして貴重な資料の散逸を防げないものかと、大学や図書館、放送局などに働き掛けるなど、努力を傾けて頂いた例も多々ありますし、私自身も微力を尽くしておりますが、現在に至るまで成功しておりません。「内容の整理」・「保存管理」・「活用」にはそれ相当の人手（経費）と知識が求められるからです。ご遺族のご意向もあって処置を急がねばならない事例も少なくない中で、具体的にどう対処すべきなのか、その方策をめぐってなんと辛く残念な思いがしつたりません。

明るい話題は、やはり「2020東京オリンピック」の決定でしょう。様々な意見もあるようですが、ここは素直に喜びましょう。しばらく続いた閉塞状況の先に映る一筋の明るい光であることは間違いないからです。そして今年前半も又、日本のタンゴ界は実りの多いものとなっています。その全ての紹介は出来ておりませんが、本誌の目次の報告記事を是非ご覧ください。特に印象深かったのは初来日のアメリータ・バルタルも「プエノス・アイレスのマリア」で、全く衰えを感じさせない舞台上に圧倒されました。この企画を実現させた小松亮太（当会会員）の熱意と努力に改めて敬意を表するものです。そう言えば小松の主宰する「東京バンドネオン・クラブ」の定期演奏会が、去る9月16日（祭日）に開催されましたが、熱気あふれる演奏会になり、多くのファンを完全に魅了し去ったのは印象的で、タンゴの明日への期待が大きくふくらむシーンでした。

そして当アカデミーの秋の恒例行事「NTAミロンガ」（第3回）が10月12日（土）に開催されました。踊る人ばかりではなく、聴く人も一緒になって楽しもう、という当アカデミーのコンセプトに基づき、生演奏は「平田耕治（当会会員）クアルテート」に河内敏昭（当会会員）の特別参加があり、さらにダンスデモはGYU（当会会員）&夏美しいという豪華な内容でした。遠く北海道や九州からの会員を含め合計150名の方々の参加を得て、楽しく実り多い集いとなりました（報告記事はTanguendo en Japón 次号に掲載されます）。



わたしのひそかに愛するタンゴ

パリで死んだひと La que murió en París



高場 将美



パリで死んだひと——この「ひと」が女性であることは、スペイン語題名では明白にわかるのだが、日本語で「パリで死んだ女」だと少しニュアンスが違うような気がする。

この曲をわたしが知ったのは、まず楽譜だった。

大阪の梅田に輸入楽譜の専門店があった（今は移転しているだろうと思う。それとも？……）。1960年代のことだが、アルゼンチンから来たアーティスト・楽団の通訳・付き人をしていただわたしは、大阪に行った機会には、24時間体制みたいな仕事なのだが、ひまを見つけて、この店に行き、クラシック・ギターの楽譜など立ち読みしていた。輸入楽譜はとても高価で、わたしは貧しいので、ほとんど買えなかった。でも、あるとき、パリで出版された、タンゴ楽団のための楽譜集があった。標準編成のバンドのための標準的な編曲で、各楽器のパート譜を、数曲まとめてアルバムにしたもので、そんなのが3冊ほどあった。意外にもあまり高くなく、わたしのお金でなんとかやりくりできたので、3冊とも買った。

その中に『パリで死んだひと』があった。ヨーロッパのタンゴ・バンド（そのころは数もずいぶん減っていたろう）が演奏したくなる曲とも思えないし、カルロス・ガルデル Carlos Gardel (? - 1935) が歌っていないからよく知られていないはずだが、題名に「パリ」が入っているので収録されたのか？

わたしは、すごく気に入った。歌詞が、当時のわたしにもよくわかる流麗な美しさで、通俗的なロマンティックさが、たまらない！ わたしは20代でしたからね！

そして、ふつうは、歌のタンゴは（良い曲ほど）語る要素が強いので、メロディは音楽的に単調で、わたしの下手なギターでは、つまらない（人に聞かせるわけではない。自分でも、つまらない）。この曲もそうだが、和音の変化で流れに起伏があって、われながらカッコいい。「いい曲だなあ」と、心の中で歌いながら（わたしは音痴なので、声に出すと、自分でもイヤになる）ギターでコードを鳴らして、楽しんでいた。

（余談ながら、この曲の入った楽譜アルバムは、ある先輩のタンゴ・ファンが見たいというので貸してあげたら、結局、返してくれなかった。コピー機なんてどこにもない時代である。でも、この曲は自分できれいに書き写して今でも持っている。書き写すための五線紙も、わたしは「高いものだなあ」と感じていた時代だった。）

さっそく曲をご紹介します。この曲のアルゼンチンでのオリジナル出版楽譜は、インターネット・サイト www.todotango.com にあるけれど、実際に初演者コルシーニ（後述）が歌ったメロディ

と音の長さに近づけて書いてみた。和音は、原作とフランスの編曲楽譜とわたしの考えのミックス。それらの差は、ほとんどないのだが。

Yo sé que aún te acuerdas del barrio perdido / de aquel Buenos Aires que nos vio partir; / que en tus labios fríos aún temblaban los tangos / que en París cantabas antes de morir. // La lluvia de otoño mojó los castaños, / pero ya no estabas en el bulevar; / muchachita criolla de los ojos negros, / tus labios dormidos ya no han de cantar. //

(わたしは知っている、今でもあなたは、わたしたちが旅立つのを見たあのブエノスアイレスの、失われた街を思い出していることを。だって、あなたの冷たいくちびるの上で、タンゴの数々がまだ震えつづけていた。それらは、あなたが死ぬ前にパリで歌っていたタンゴ。

秋の雨が栗の木たちを濡らした。でももう、あなたはブルヴァール（大通り）にはいなかった。黒い目の、南の土地のむすめ、あなたの眠ってしまったくちびるは、もう歌うことはないだろう。)

作詞者 **エクトル・ブロンベルグ Héctor Pedro Blomberg (1889 - 1955)** については、別の記事で、いつか詳しくご紹介するが、20代の初めにフラリと外国の貨物船に乗り込み、2年間ほど異国をめぐってきた詩人である。この曲を作る前は、おもに、19世紀の歴史エピソードをとりあげたラジオ・ドラマ・シリーズの作者として知られていた。

それでは、2番。

Siempre te están esperando / allá en el barrio feliz; / pero siempre está nevando / sobre tu sueño en París. // Muchacha, cómo tosías / aquel invierno, al llegar . . . / como un tango te morías / en el frío bulevar. //

(いつまでも、みんながあなたを待っている、あのしあわせな街で。でも、いつまでも雪が降っている、パリのあなたの夢の上には。むすめよ、どれほどあなたは、咳（せき）こんでいたことだろう、ここに着いたあの冬に……。1曲のタンゴのように、あなたは死んでいった、冷たいブルヴァールで。)

具体的なことは言っていないが（だからこそ詩人！）、「パリで死んだひと」はタンゴを歌う女性で、恋人といっしょにパリでの活躍を求めて海を渡り、パリの寒さに殺されてしまったというわけだ。この部分で「むすめよ」と呼びかけるところは、原作では「鳩よ paloma」だ。あんまり美辞麗句すぎると考えたコルシーニが、ふつうに言い換えたのだろう。20代のわたしは、コルシーニのこの曲を聴いたことがなく、元の楽譜どおり「鳩よ」と声には出さずに歌って、涙をこぼしていた……ハハハ、青春ですねえ！

1 番の繰り返し部分前半と、2 番の繰り返し部分後半(全体の最後)の歌詞をご紹介します。

Envuelta en mi poncho, temblabas de frío, / mirando la nieve caer sin cesar; / buscabas mis manos, cantando en tu fiebre / el tango que siempre me hacía llorar. //
Así una noche te fuiste / por el frío bulevar / como un tango viejo y triste / que ya nadie ha de cantar. / Siempre te están esperando / allá en el barrio feliz, / pero siempre está nevando / sobre tu sueño, en París.

（わたしのポンチョに包まれて、あなたは寒さで震えていた、やむことなく降りしきる雪を見ながら。あなたはわたしの両手を求めつづけていた、わたしをいつも泣かせたあのタンゴを、熱にうかされるなかで歌いながら。……

こうしてある夜、あなたは行ってしまった、冷たいブルヴァールを通って。もうだれも歌うことがない、古い悲しいタンゴのように。いつまでも、みんながあなたを待っている、あのしあわせな街で。でも、いつまでも雪が降っている、パリのあなたの夢の上には。）

この曲を実際に耳にした最初は、アルベルト・カスティージョ **Alberto Castillo (1914 - 2002)** の歌だった。偶然手に入ったアルゼンチン盤のLPに入っていた。「鳩よ」という呼びかけが、彼ならではの味（というよりアク）を付けた歌いかたに合っていて、そこがいちばん好きだった（いまでも好きです）。また、タンゴ歌手というものは、このように元のメロディを変えて語るんだなあ……と感心した。

この録音は、オーケストラの演奏も一級品で、表情豊かでメロドラマ調、そしてダンスにもいいのではないのでしょうか？ ぜひ、いつか聴いてみて下さい。

……カスティージョのレコードの作者クレジットで、**ブロンベルグ**という変わった名前（最近知ったのだがノルウェー系なのだそうだ）に目が留まった。以前よりは、わたしのタンゴ知識が少し増えていたので、「あっ！ この名前は知ってる」

ワルツ『**ラ・プルペラ・デ・サントルシーア La pulpera de Santa Lucía**』の作詞者だ！

この曲には、題名を説明するだけでも別に記事ひとつ書かなければならないほど、深い(?)バックグラウンドがある。そんなことは知らず（題名も知らなかった）18才ごろのわたしが、神保町のタンゴ喫茶《ミロンガ》で聴いて魅了されていた曲だ。わたしが好きなのを察して、お店の愛子さんは、ほかのお客がいないときに、そのワルツのテープをかけてくれた。わたしは、その好意にもはじめは気がつかず、「いつも流れるなあ、やっぱりいい曲だ」なんて思っていた。愛子さん、すみません。

さて、今では昔のタンゴ界の情報もたっぷり手に入る。

この曲の作曲者（この時代は、歌詞がまずあって、そこに作曲する）**エンリーケ・マシエール**

Enrique Maciel (1897 - 1962) は、アフリカ系アルゼンチン人のギタリストだ。わたしは、今ではこの人の演奏も作曲も大好きなので、彼を中心に曲を紹介しよう。

マシエールは、カトリックの学校に行き、そこで、かなりしっかりした音楽教育を受けたと思われる。もちろん天才だったからだが、ピアノ、オルガン、バンドネオンをプロ級の演奏ができた。作曲法・和声なども基本的なことだけだろうが、確実に身に付けていた（はずだ）。

18才ぐらいでプロ・ギタリストになり、今日でいうフォルクローレの歌手の伴奏をした

り、地方のダンスホール（娼家？）でタンゴを演奏したりしていた。20才のころから作曲をはじめた。余談だが——彼がごく初期につくった曲で、歌詞が平凡だったので埋もれてしまったメロディを、ギタリストのペトロッシ **Horacio Pettorossi** が覚えていて、後にパリで金に困ったときに、コントゥールシ **Pascual Contursi** に新しく歌詞を付けさせ、指揮者バチーチャ **Juan D'Ambroggio "Bachicha"** に売り、バチーチャ名義で著作権登録させた。かの『場末のバンドネオン **Bandoneón arrabalero**』である。この曲の真の作曲者はマシエールだった。

マシエールは、1921年にR C Aビクターから契約され、数々のスター歌手の録音を伴奏した。そして1925年に、歌手イグナーシオ・コルシーニ **Ignacio Corsini (1891 - 1967)** の専属ギタリストになり（他の仕事もしたが）、ギター・トリオのリーダーとして、コルシーニの芸歴のほとんどすべてを共にした。すばらしいトリオの他の2人（いちばん長く共演したメンバー）は、いずれも最高級の名手ロセンド・ペソーア **Rosendo Pesoa (1896 - 1961)** とアルマンド・パハース **Armando Pagés (1903 - ?)** である。

1929年に、ブロンベルグ作詞、マシエール作曲の、アルゼンチン内乱時代を背景にしたワルツ『ラ・プルベラ・デ・サントルシア』が、コルシーニの歌で、今日のミリオン・セラーに匹敵するヒット。ラジオで歌うと、アンコールの電話が殺到したという。すぐに同じ作者コンビで、同じ時代背景の、今日でいうフォルクローレのスタイルの数曲が作られ、これらも大好評だった。

1930年には、ガラリと題材を変えて、同じ作者コンビで、タンゴ2曲が作られた。それが『パリで死んだひと』と『道に迷った女船客 **La viajera perdida**』である。もちろん、コルシーニが初演者。

さて、来年の1月、パリから来るバンドネオン奏者オリヴィエ・マヌリ **Olivier Manoury** といっしょに、わたしがギター伴奏している峰 万里恵さんが1回だけライブをやることになった。万里恵さんが「この機会に『パリで死んだひと』を歌います」と言ったので、わたしはうれしくて仕方がない。

*この曲をYouTube で聴きたい方は——コルシーニ http://youtu.be/G9hskm3_lkg
カスティージョ <http://youtu.be/-M4xCgdW9A0>



●イグナーシオ・コルシーニとギタリストたち。
すわっているのがコルシーニ。右端がマシエール。

東京のタンゴ・スポット回想 (3)

「カンデラリア」 (六本木)

- 米山 瑛子
- 島崎長次郎 (聞き手)

○ 前回の「ノスタルヒアス」(赤坂)の後には、同じ港区で程近い六本木にあった「カンデラリア」(1975-2001)ですが、赤坂にしても六本木にしても歌に歌われるほどで、当時話題のタンゴ・スポットが、そんな東京のど真ん中にあったというのも凄いですね。

経営者の刀根英子さんとは大変親しかった、とお聞きしましたが……。



● そうですね。はじめてお目にかかったのは40年ほど前のことになります。何かの会の帰りに、一杯やろうということで新宿のライブハウス風の「マルティン・フィエロ」に入りました。一行は、早川真平さんを筆頭に、ホルへの場、大隅かおる(元ウルグアイ大使夫人)、中西義郎の皆さんに、主人と私でした。ステージでは男性がなにやらギターの弾き語りをしていましたが、それが後ほど出てくる高野太郎さんで、それを最前列で熱心に聴いていたのが当の刀根英子さんでした。刀根さんとはとりとめもない会話でその時は終わりました。

久々に上京した嵐子さんと私、O.パレンテ

○ その刀根さんが経営する「カンデラリア」を知り、かかわるようになったのは……。

● その後、そうですね、2年ほどして刀根さんから主人(宏=会員)あてに手紙が届きました。(実は刀根さんと主人は千代田区の番町小学校が同じ)内容は、“今度、六本木に「カンデラリア」というタンゴのライブハウスを開店するので、是非いらっしゃってください”とのことでした。開店したのは1975年のことで、主人とはときどき遊びに行きました。そんなあるとき、刀根さんの協力者の高野太郎さんに“最近タンゴの歌をならっているの”とお話したら、“それは面白い、今なら丁度お客もいないので、一曲歌ってみない?”といわれ、当夜のピアノ奏者大塚典(2013没)さんの伴奏で「カミニート」を歌いました。そうしたら、どう思われたのか、刀根、高野のお二人から“一週間に一度歌いにこない?”といわれ、その後毎週水曜日にお店に出させてもらうことになり、その後、月水木の週3回になりました。

○ そもそも、そこでのショーの形態や内容というのはどんな風でしたか……。

● ショーは3回おこなわれ、ピアノは日替わりで、大塚典、熊田洋、岩崎滋之、米山淳子（初期は鳥昭彦）、それに来日したときはオマル・バレンテ（2008没）、バンドネオンは3ヶ月ごとに変わり、ドミンゴ・スカポラ、フアン・カルロス・コスタ、プーチョ・コラリ、セニ、ポーチョ・バルメル、ルーベン・イダルゴ、初期は京谷弘司など。バイオリンは古橋ユキ、コントラバスは東谷健司、ギターはアンヘル・ミランダ（ギターラス・デ・オロ）、それに高野太郎などが記憶されています。ショーの中身は、タンゴとフォルクローレとの組み合わせで、多くの方に喜んでいただけるように工夫されていましたが、末期になるにしたがって客足は次第に少なくなりましたね。刀根さんは古典のタンゴとガルデルがお好きで、高野太郎さんには、つねづねガルデルのレパートリーを歌って欲しいと口にされていました。そして、ショーの合間には、座っている右側の引き出しの中の沢山あるレコードの中から、好んで1920年代の名盤、たとえば、「ミ・レフーヒオ」「ビエホ・リンコン」「アルマ・タンゲーラ」といったものをかけておられました。もちろん来日したメンバーもこれを喜び、眼を細めて聴き入っていたのを覚えています。

○ 当時あっては広く知られたタンゴ・スポットでしたから、様々な方が見えたでしょうね。その顔ぶれや、そのときの印象などを……。

● そうですね。来日したアーティストでは、バイオリンのレイナルド・ニチューレ、ピアノのオルランド・トリポディ、オマル・バレンテなど。そして再三の来日でおなじみのバンドネオンのウーゴ・パガーノ、それにカルロス・ニエシ、歌手のアルベルト・ビアンコ、グラシエラ・スサーナ、フォルクローレの関係ではエドゥアルド・ファルー、アルヘンティーナ・ルナなど。さらに、アルゼンチン大使のサントス・ムニョスさんをはじめ、今は亡き淡谷のり子、藤沢嵐子、高橋忠雄、大岩祥浩のみなさん。それに島崎長次郎さんなど、多士済々でしたね。

この中で特に印象に残っているのはトリポディで、私の歌を膝を揃えてじっと聴いてくださり、その上で、“ガンバッテ”と色紙に書いて下さったのには感激しました。私にとっての大切な宝です。そのトリポディも帰国後間もなく亡くなってしまいました。そういえば名手のニチューレも、バレンテも相次いで天国に旅立ってしまったのは寂しいかぎりですね。

さらに私的にいえば、思い出に残るのが歌手のアルベルト・ビアンコです。ご存知のようにビアンコは人気抜群で、10回近い来日経験をもっていました。1991年のセステート・タンゴで3回目の来日をした際に店にこられました。私の歌う「エル・ディア・ケ・メ・キエラス（想いのとどく日）」にあわせ、私の首に腕をまわし、情感豊かにドウオをして下さったのも忘れられない思い出になりました。



A. ビアンコとのドウオ

○ その頃、ユニークなお店のファン・サービスもあったと、お聞きしましたが……。

● ええ、そうです。一年に一度くらいでしたが、千葉の九十九里浜にある成東海岸でアサードをやり、ショーを観たり、浜辺で遊んだり、好きな人は乗馬を楽しんだり、それは楽しい一日

でした。参加者は60～70人はいたでしょうが、裏方と出演者は前日から泊り込んで準備し、それはそれは賑やかなものでした。なにしろアサードの60～70人分の肉は巨大な魂で、焼くのも一苦勞で、それをじっくり焼いて一人づつ分けるのですから大変でした。集った人は、見たこともない豪快な料理だったので、多分ビックリしたことでしょう。

○ 四半世紀近く続いていたものの、タンゴ・ファンのオアシスとして存在してきたさしもの「カンデラリア」にも、秋風がしのびよって来たのですね……。

● どこでもそうなのでしょうが、もの珍しさもあって開店当初はとても賑やかでした。それが20年も経つとお客様も年をとられるし、景気の変動も微妙に影響し、それに多少の飽きも加わって客足は次第に遠のきはじめました。そんなあるとき、刀根さんから声をかけられました。“なにやら最近毎日お店に来るのがきつくなったので、できたらあなたに代わってほしいのだけれど、どうか？”とのことでした。もちろん私は自信もないし、第一に母がこの頃衰弱していて、その面倒も見なくてはならないのでお断りしました。今考えてみると、店の状況ももちろんうまくいかなくなってきたことありますが、刀根さん自身の体にその頃少しづつ異変が起きていたのかもしれない。

そして間もなく、刀根さんの唯一の相棒だった高野太郎さんが病気になり、ついに店は閉鎖のやむなきに至ってしまいました。2001年春のことです。そしてその年の秋に太郎さんは亡くなったのですが、さらに悪いことは重なるもので、その葬儀に、なんとも当の刀根さんは参列できなかったのです。すでに自らの重い病気のために入院中で……。

こうして次々にタンゴに生きた人々が旅立っていくのを見ると、しみじみと人の世の儚さと、無常を感じます。

○ 3回にわたり、かかわった東京のタンゴ・スポットの思い出を語っていただきましたが、最後に改めて述べておきたいことがあればどうぞ。

● すでにお話しをしてきたように、京王プラザ・ホテルの「コンソート」、赤坂の「ノスタルヒアス」、そして今回の六本木の「カンデラリア」と、著名なお店にかかわり、貴重な体験をさせていただいたことに、改めて感謝の気持ちで一杯です。その間に、多くの内外の方々とのコミュニケーションもでき、楽しい日々を過ごすことができたのは何よりのことで、母や、その後の夫の看病などもあって、いまだに本場のアルゼンチンにも行くことは叶いませんが、それぞれの店で、数々の来日したアーティストとの交流があったお陰で、アルゼンチンには本当に何回も行ってきた気がします。このほかにも新宿の西口にあつて、タンゴのナマを日替わりで楽しませてくれた店に「エル・パティオ」がありまして、私も7年ほど歌わせてもらいました。オーナーは、フォルクロレのギター弾き語りの歌手、アンチャ・本間さんで、ここも長期間、不景気にかかわらずタンゴを愛し、ファンを喜ばせるためによく頑張られたと、その烈々としたエネルギーに心からの敬意を表したいと思います。

○ 3回にわたり、楽しいお話をありがとうございました。今後のご活躍をお祈りいたします。

(2013 / 9 / 20収録)

思い出のタンゴ喫茶巡り(第8回)

ライブ・レストラン&パブ「アンサンブル」(盛岡)

関村 幸治 (東京・羽村市)



私は20数年前に会社を定年退職しました。岩手・花巻には父親がひとり生活していましたので、親孝行のつもりで花巻の生活を始めました。花巻のタンゴ好きの友達とお喋りしている中で、盛岡で生演奏しているレストランがあるとの情報を得た。その店の名前がバンドネオン奏者の森川俱志さんが経営する「アンサンブル」で、初対面は今から15～6年前のことである。店内にはインディアン・ハーブ(アルパ)を使用したラテンリズムの曲が演奏されていた。後になって知ったことだがその演奏者は平山順子(よりこ)さんで、ピアノが本職、山岳ガイド認定資格も持つマルチ人間でした。

その後も年一回位の割合で「アンサンブル」に出かけた。1999年5月17日には姉夫婦、家内の4人でタンゴ好きの義兄の誕生日のお祝いディナーに連れ立って出かけました。夕方6時半頃でしたが、最初は私たち夫婦4人だけでした。森川さんと種々話し合う中でビデオ撮りの許可を得ました。19時頃より生演奏が始まり、第一曲目は皆さんお馴染みの曲「フェリシア」以下「エル・チョコクロ」「リベルタンゴ」「ラ・クンパルシータ」「ア・ラ・グラン・ムニェカ」「タコネアンド」など全15曲を1時間強で演奏されました。森川さん達のトリオ(バンドネオン、バイオリン、ピアノ)の演奏はステキで、特にピアノの低音部とペダルの使用方法が良かったと思います。

この録画したビデオを編集し、そのコピーを故大岩先生にお送りしました。2～3日後にTELがあり、森川さんが元気で活躍されている様子を話し合いました。その後日本タンゴ・アカデミーより「東北タンゴの集い」のご案内が届きました。会場は「アンサンブル」とのことでした。

この案内が札幌に次いで地方で行うレココンの2回目で、次に金沢、次いで宮崎と、各地で開催されるきっかけとなったようです。第1部のコメンテーターは、故大岩先生、松本さん、島崎さん(現在の日本タンゴ・アカデミー会長)の3人で行われました。そのプログラムは次の通りです。



日本タンゴ・アカデミー主催2000/5/28 盛岡・アンサンブルに於いて

第1部：21世紀に伝えたいタンゴの名盤

- | | |
|---------------|-----------------------|
| 1. サン・テルモ | フランシスコ・ロムート楽団 |
| 2. 老いた虎 | オスバルド・フレセド楽団 |
| 3. 祈り | ファン・マグリオ “パチョ” 楽団 |
| 4. 7月9日 | ロベルト・フィルボ楽団 |
| 5. パリのカナロ | フランシスコ・カナロ楽団 (以上 大岩) |
| 6. わが悲しみの夜 | カルロス・ガルデル (歌) |
| 7. 淡き光に | ロシータ・キロガ (歌) |
| 8. ムチャーチョ | アンヘル・バルガス (歌) |
| 9. 君われを愛する日 | ビルヒニア・ルーケ (歌) (以上 松本) |
| 10. ア・フエゴ・レント | キンテート・レアル |
| 11. コントラバヘアンド | アストル・ピアソラ五重奏団 |
| 12. バンドネオンの嘆き | アニバル・トロイロ楽団 |
| 13. 解放 | オスバルド・プグリエーセ楽団 |
| 14. バイア・ブランカ | カルロス・ディ・サルリ楽団 |
| 15. ポエド | フリオ・デ・カロ楽団 |
| 16. ラ・クンパルシータ | ファン・ダリエンソ楽団 (以上 島崎) |

第2部は島崎さんの司会で東北在住アカデミー会員による「私の愛聴盤」で、その詳細はタンゴ・アカデミーの機関誌「タンゲアンド・エン・ハボン」2000年のNo.6号のP.110以下に掲載されています。出席者は下記の通りです。

第2部：東北在住アカデミー会員による「私の愛聴盤」

1. 高橋康宏 (山形県) 「トード・ブエノスアイレス」 飯泉昌宏トリオ
2. 佐藤勝夫 (秋田県) 「マリーア」 マリーア・グラニーニャ (歌) 伴奏・ワルテル・リオス (bn)
リカルド・ドミンゲス (g)
3. 佐藤善英 (宮城県) 曲名? アニバル・トロイロ/フリオ・デ・カロ楽団
4. 佐々木嘉範 (秋田県) 「エル・モティーボ」 アニバル・トロイロ楽団、ゴジェネチェ (歌)

第3部は「アンサンブル」の森川さんトリオの生演奏で、プログラムは下記の通りです。

第3部：演奏：森川倶志とタンゴ・アンサンブル

1. フェリシア
2. ビダ・ミーア
3. ロ・ケ・ベンドゥラー
4. シルエタ・ボルテーニャ (ミロンガ)
5. 大きな人形に
6. 台風
7. 下町のロマンス (バルス)
8. ラ・シルエータ
9. 恋人もなく
10. ラ・クンパルシータ
11. バジャドーラ (ミロンガ)
12. リベルタンゴ
13. さらば草原よ
14. 想い出

以上の14曲で (楽団) メンバーは下記の通りです。

<楽団メンバー紹介>

森川俱志（もりかわ・ともゆき）バンドネオン

東京都出身。坂本政一とオルケスタ・ティピカ・ポルテニャ、中田修とオルケスタ・ティピカ・アルヘンティーナを経て、1966年ポルテニャの一員としてアルゼンチンなど南米諸国、スペイン、アメリカなど2年間にわたる演奏旅行に参加。のち独立してタンゴ・アンサンブルを結成。1978年以降は盛岡市レストラン“アンサンブル”を拠点に多彩な演奏活動を続けている。89年にLP、99年、09年にCDをリリース。

花田慶子（はなだ・けいこ）バイオリン

東京都出身。武蔵野音大卒。リヒネフスキー、グレーラー、レーマン氏等に師事。東京フィルハーモニー等を経て、73年タンゴ・アンサンブルに加入。

高田菜穂（たかだ・なほ）ピアノ

愛知県春日井市出身。桐朋学園大学音楽部卒。全日本学生音楽コンクール名古屋大会入選。ピアノの音楽に触れてその原点であるタンゴを志し98年タンゴ・アンサンブルに加入。

「アンサンブル」で発売している音源は3種類あります。最初の一枚はLPで「森川俱志とタンゴ・アンサンブル」結成10周年記念アルバムで、トリオのメンバーは森川さんがバンドネオン、バイオリンは花田さん、ピアノは熊田洋さんでした。



「Tango...El brillo del bandoneón ～タンゴ...バンドネオンの輝き」 GLORIA GL-1101

Side A

1. 淡き光に A media luz
2. 台風 El huracán
3. 恋人もなく Nunca tuvo novio
4. さらば草原よ Adiós pampa mía
5. 秋のカプリチヨ Capricho otoñal

Side B

1. ラ・クンパルシータ La cumparsita
2. ウノ Uno
3. バンドネオンの嘆き Quejas de bandoneón
4. 心の底から Desde el alma
5. アディオス・ノニーノ Adiós Nonino

2枚目のCDはLP発売の10年後の1999年に発売され、その収録曲は下記の通りです。

La Silueta ～影～ GLORIA GL-1002

1. 大きな人形 (A LA GRAN MUÑECA)
2. ビダ・ミーア (VIDA MÍA)
3. 忘却 (OBLIVIÓN)
4. ラ・シルエータ (LA SILUETA)
5. サンバ・カンシオン (SAMBA CANCIÓN)
6. ホテル・ヴィクトリア (HOTEL VICTORIA)
7. 郷愁 (NOSTALGIAS)
8. エル・チョコロ (EL CHOCLO)
9. 下町のロマンス (ROMANCE DE BARRIO)
10. ガウチョの嘆き (SENTIMIENTO GAUCHO)
11. シエンプレ・ア・ブエノスアイレス (SIEMPRE A BUENOS AIRES)
12. ジェラシー (JEALOUSIE)
13. 靴音高く (TACONEANDO)
14. リベルタンゴ (LIBERTANGO)
15. ブエノスアイレスの冬 (INVIERNO PORTEÑO)

このCDを録音するときのピアニストはLP時の熊田さんではなく、高田菜穂さんで（1～5、2～15）9曲、平山順子さん（6～11）の6曲で行われた。

2009年には30周年記念として3枚目の録音「想いの届く日」を製作しております。ピアノは松永裕平と工藤溶子。

このCDでは初めてボーカルの小島りち子が入っている。

「El día que me quieras ～ 想いの届く日 ～」GLORIA GL-3113

1. フェリシア
2. 来たるべきもの
3. パジャドーラ
4. たそがれのオルガニート
5. めぐり逢いのワルツ
6. ノスタルヒコ
7. チキリン・デ・パチン
8. エル・チョクロ
9. 小雨降る径
10. 群衆
11. ノクトゥルナ
12. 忘却
13. ラ・ジュンバ
14. アディオス・ノニーノ
15. 想いの届く日（これらLP、CDは店内販売のみです）

「アンサンブル」には、バンドネオン奏者の京谷弘司さんや小松亮太さん、バイオリンの志賀清さん等が時々来店されておられるようです。タンゴ全盛期から活躍していた池田光夫、前田照光、岡崎恵二ほかのバンドネオン奏者が去った現在、最長老は森川さんじゃないでしょうか。

レストラン「アンサンブル」はドイツワインや本格的な欧風料理も大変おいしく楽しく過ごされますので、東北地方の旅路に立ち寄られることをお勧めします。

● 会員アンケート“Chiqué”ご案内

2006年秋号から2008年秋号まで5回に亘って掲載された第1回会員アンケート“La cumparsita”に続いて第2回は“Chiqué”（3曲選）を取り上げます。皆さま奮ってご参加下さい。

（Ⅰ）応募の方法

- ①メール：下記の専用アドレスをご使用ください。Tangolandia-chique@hotmail.co.jp
- ②郵送：Tangolandia 誌裏表紙記載の住所に大澤 寛宛でお送り下さい。封筒に“アンケート”と明示して下さい。なおFAXでの受け付けはいたしませんのでご注意ください。

（Ⅱ）記入の仕方

- ①お名前およびお住まいの都市名
- ②まず好きな順に演奏者・楽団名をお書き下さい。カタカナでもローマ字でも結構です
 1. 演奏者（楽団）名 出典（録音時期など判る範囲で結構です）
 2. 同上
 3. 同上
- ③3曲それぞれにまつわる思い出・エピソードなどを1曲について文字数300字見当でお願いします。あくまで目安です。
ご参考までにTangolandiaは9ポイント横書きで1行40文字です。

（Ⅲ）日付

メールの場合も郵送の場合も必ず発信・発送日をご記入下さい。
掲載は原則としてこの日付の順とします。初回掲載は2014年春号を予定します。

（編集部）



私の愛聴盤

～第4回～

水野 中 (埼玉県・ふじみ野市)

原稿依頼を簡単に引き受けたが、よくよく考えると、えらいものを受けてしまったとの思いが湧いて来た。思い起こせば埼玉の田舎でピアノも無く、音楽専科の先生もない小中学校で過ごした私は、音楽の基礎的な知識は全く無く、音楽とは無縁の生活をしてきた。何故タンゴを聴くようになったのかも思い出せない。

所持しているレコードも、SPは一枚も無く、数えたことがないので正確には判らないが、LPで約300枚、CDが900枚位で決して多くはない。その中から好きな曲、よく聴く曲を愛聴盤として挙げて見ることにした。



最初買ったレコードは、バルナバス・フォン・ゲッツイの「碧空」と「夜のタンゴ」だった。メロディーも良く、きれいな演奏でよく聴いたのだがすぐに飽きてしまった。二枚目は、カルロス・ディ・サルリの「ラ・クンパルシータ」と「ア・ラ・グラン・ムニエカ」のカプリングのEP盤ビクター AGS 5003を買い何度も何度も聴いた。曲も演奏も良く特に「ラ・クンパルシータ」が素晴らしかった。後にファン投票で一位になったと聞いたが納得できる。考えて見るとこの一枚が愛聴盤第一号かもしれない。

レコードが仲々買えない時期、兄から中古レコードを探してみたらとアドバイスを受け、池袋の八勝堂（古書と中古レコードの店）浅草の宮田を教えて貰い、時々顔を出したが、両店ともタンゴはあまりなかった。根気よく通っているうちに宮田で、4曲入りEP盤ビクター AGE 1007「タンゴ好きの娘」（フランチャーニ=ポンティエール楽団）とビクター AGE1015「二つのヴァイオリンと一つのバンドネオン」を見つけて迷わず購入した。AGE 1007 のフランチャーニ=ポンティエール楽団の演奏はスウィング感に溢れ、アンサンブルも良く、何よりもフランチャーニのヴァイオリンの素晴らしさに驚嘆した。演奏では「タンゲーラ」が良く、アストル・ピアソラの「コントラティエンボ」は初めて聴いた曲だったが、フランチャーニのヴァイオリンが素晴らしく、新しい曲なのに抵抗なしに聴けた。「二つのヴァイオリンと一つのバンドネオン」のレコードは、フランチャーニ=ポンティエールの「ロ・ケ・ベンドゥラー」E. フランチャーニの「タンポリレーラ」A. ポンティエールの「フェゴス・アルティフィシアール」アルフレド・ゴビの「エントラドル」という4楽団のオムニバスであった。「ロ・ケ・ベンドゥラー」は、渋谷のプリンスで小澤泰とコリエンテスの演奏を聴いて記憶していた。フランチャーニ=ポンティエールの演奏は華やか

さも有りテンポも良く、冒頭のピアノ、終曲のフランチーニのヴァイオリンも良いが、ポンティエールのバンドネオンが素晴らしい。「エントラドル」は初めて聴く曲だがなかなか良い。

演奏のA. ゴビ楽団も初めてだが、歯切れの良い演奏で、終曲のバンドネオンも素晴らしく、この二枚のレコードも愛聴盤と言える。

中古レコード店にもタンゴは少なく、たまに在ってもLPは高く購入は諦めた。従ってEPと、この時期に発売されたコンパクトダブル33や17センチLP等をボチボチと買っていた。その中で手にしたポリドールDP-1195「アニーバル・トロイロとロベルト・グレラ四重奏団」のEPは素晴らしかった。トロイロのバンドネオン、グレラのギター、エクトル・アジャラのギタロン、エンリケ・ディアスのコントラバスのメンバーで「ラ・クンパルシータ」と「ラ・カチーラ」の二曲だが見事な演奏であった。トロイロのバンドネオンは勿論のこと、ギターという楽器は歌の伴奏楽器位にしか思っていなかったが、弾き手によってはこんな表現が出来ることを初めて知った。グレラのテクニックの素晴らしさ、トロイロとの息の合った演奏は鳥肌ものである。このEPは愛聴盤と言える。



手元にあるコンパクトダブル33 ビクター CP-1044「タンゴ珠玉集(第4集)」は収録曲が地味であり、何故購入したのか覚えていない。ディ・サルリ、ダリエンソ、フランチーニ=ポンティエール等の名前に釣られて買ったものかも知れない。しかし、このレコードは聴いてみると仲々素晴らしいものであった。J. ダリエンソの「ラ・カチーラ」は、彼独特の演奏スタイルで、初めから終曲まで一糸乱れず一気にもって行くのが凄い。A. ダゴスティノの「セ・ジャマーバ・エドゥアルド・アローラス」は歌手のルベン・カネーが歌う知らない曲であったが、間奏にアローラスの「エル・マルネ」と「ラ・カチーラ」を入れ、これが効果を挙げており楽しめる一曲である。このレコードの一番は、一曲目のディ・サルリ楽団でホルヘ・ドゥランの歌う「ア・ラ・ルス・デル・カンディル」である。ディ・サルリの前奏が素晴らしく、続くJ. ドゥランの声が良く堂々とした歌いっぷりがまた素晴らしく、このレコードは間違いなく愛聴盤である。

通っていた池袋の喫茶店「らん」で、スイング感溢れる演奏で、男性歌手の声が素晴らしく、終曲の口笛も強く印象に残った一曲がある。聴き終えてすぐ店員に、何と言う曲か、歌手は誰かと聞くと、曲名は「シルバンド」歌手はフーリオ・ソーサ、演奏はアルマンド・ポンティエル楽団と教えてくれた。買うか買うまいか、散々考えた末に買うのは諦めた。後年CDの時代になってラティーナから「フーリオ・ソーサ SDL2011」が発売された。これに「シルバンド」が入っており、他に「レンコール」「マノ・ア・マノ」「マダム・イボンヌ」「カンバラージェ」など全18曲。おまけにレオポルド・フェデリーコのバンドネオン・ソロ伴奏で「ミ・ノーチェ・トリステ」と「ラ・クンパルシータ」が入る徳用盤で、これを楽しんでいる。まさに愛聴盤である。



レコードの購入には都内まで出る必要があったが、昭和38～39年頃に、我が田舎町にもレコード店が開店したので早速行ってみた。残念ながらタンゴは一枚も無かった。店主と話すタンゴは取り寄せ出来るとのことで、この店での購入の第一号はSET 33,34「ザ・ベスト・オブ・タンゴ」ディ・サルリ楽団の二枚組LPであった。このLPは収録曲もよく、有名曲も多くて初心者には打ってつけである。「エル・アマネセール」の綺麗な演奏「エル・チョコクロ」の終曲のバンドネオン変奏の素晴らしさ、「ラ・カチーラ」の豪快さ「コム・イル・フォー」「エル・ポジート」のヴァイオリンの華麗さなどどれも素晴らしく愛聴LPの一枚である。

ようやくLPレコードを買う余裕が出てきたこととレコード店が出来たことで、都内まで行かずに手に入るのが何とも嬉しい。1965年のオスバルド・プグリエーセ公演を聴いてフランシスコ・カナーロのそれとは違った感動を覚えたこともあり、待望のO.プグリエーセのLPオデオンOR 8010を購入、続いてフィリップスSFX-7009 さらに7093を買った。

どちらも素晴らしいものだが最初買ったオデオンOR8010「オスバルド・プグリエーセ傑作全集（第3巻）」が良い。「ガージョ・シエゴ」「アルマ・デ・ポエミオ」の演奏も良いが、特に「チケー」が良く、ピアノのソロに続いてヴァイオリン、バンドネオンのソロをたっぷりと聴かせ、アンサンブルも良く圧倒される演奏である。「ラ・クンパルシータ」はプグリエーセがどんなアレンジをするのか期待したが、カルロス・ギードの歌に続きネグロ・メーラの語りが入り最後がホルヘ・マシエルの歌で終わるといふ、ある意味では意表をついた面白いものになっていた。他にはミゲル・モンテロとホルヘ・マシエルのデュオで「シルエタ・ポルテーニャ」や、当時流行の歌謡タンゴ「アディオス・コラソン」まであり、楽しめる一枚の愛聴盤である。

1960年代末頃だと思うが「今日のアルゼンチン・タンゴ・シリーズ」がポリドールから発売された。何枚か購入した中で第一集「タンゴの四巨星 レイナルド・ニチューレ四重奏団」は一番の品であった。リーダーのレイナルド・ニチューレ（Vn）の名を知らなかったし、他のメンバーもピアノのアティリオ・スタンポーネ以外は知らない名であった。一曲目の「チケー」を聴いて、これまでに聴いたものとは全く違った演奏の素晴らしさに圧倒された。ピアノのソロからバンドネオン・ソロに続き、終曲のヴァイオリンのソロが華やかで素晴らしい。モダンさもあり格調高く気品のあるR.ニチューレの奏法に痺れた。B面一曲目の「インスピレーション」も「チケー」と甲乙付けがたく素晴らしい。全部で12曲収録されているが「エル・モティーボ」「ティエリータ」「ラ・クンパルシータ」「ロス・マレアードス」なども良い。文句なしの愛聴盤である。

当時買い集めたレコードはフランシスコ・カナーロ、ロベルト・フィルポ・クアルテート、アーニバル・トロイロ、ホアン・ダリエソ、ホセ・バツソ、キンテート・レアル、フロリンド・サツソーネ、オスバルド・フレセドなどである。中古レコード店にもよく足を運んでいたがタンゴにはお目に掛かれず無駄足を踏んでいた。そんな折、新宿の戸川を覗いたところ、店頭でレコードではないが「アルゼンチン・タンゴ」と書かれたソノシートを見つけた。日本エンゼルレコード社発売のエンジェルボックス24 LP33回転、片面2曲、四枚組のソノシートだった。演奏が早川真平とオーケスタ・ティピカ東京に特別参加フェルナンド・テル、歌は藤澤嵐子、菅原洋一、国井敏成となっている。（一枚目）「ラ・クンパルシータ」「インスピレーション」演奏ティピカ東京、Bn ソロがフェルナンド・テル。（二枚目）「ラ・モローチャ」藤澤嵐子「ウノ」国井敏成（三枚目）「ビエハ・ピオラ」藤澤嵐子「シレンシオ」菅原洋一（四枚目）「エスペラール」藤澤嵐子「ル

ナ・トゥクマーナ」菅原洋一&国井敏成が収録されている。一枚目の「ラ・クンパルシータ」は、解説によればアストル・ピアソラがアニーバル・トロイロのために編曲したものを基本とした演奏であり、Bn ソロはF. テルの即興によるものとされている。演奏もテルのソロも素晴らしい。「インスピレーション」はアルヘンティーノ・ガルバンのアレンジのものだが、曲の中盤からピアノのソロの後にチェロとヴァイオリンの合奏、続いてバンドネオンのソロから終曲へと仲々良い演奏である。藤澤嵐子の歌は他のレコードやCDで聴くことが出来るが、菅原洋一&や国井敏成の歌は聴けるのだろうか。フォルクローレの「ルナ・トゥクマーナ」はここではタンゴにアレンジされて、二人によるデュオで歌われている珍しいものである。

このソノシートは、もしレコード化されていないとすれば、中古品とは言えノイズも少なく、私には愛聴盤というより貴重盤である。

1968年、オスバルド・プグリエーセ楽団から歌手を含む主力7名が退団し、セステート・タンゴを結成して活動を始めた。メンバーのほとんどが編曲者としての名声もあり、また作曲者として優れた作品を発表している面々である。Bn にオスバルド・ルジェーロ、ピクトル・ラバジェン、Vn にオスカル・エレロ、エミリオ・バルカルセ、Cb はアルシーデス・ロッシ、歌手ホルヘ・マシエルの7人である。演奏スタイルはプグリエーセ楽団のものを継承し、完璧なアンサンブルで演奏する素敵な楽団である。RCA から発売された三枚のLPと、歌手のホルヘ・マシエルが死んでラウル・フネスに替わってからのものも含め四枚のCDと合わせ計八枚の音源を持っているが、ホルヘ・マシエル在団中のものが優れているように思う。RCA のLP三枚のうちの第二集が良いという人もあるが、わたしはデビュー盤の第一集が良いと思う。メンバーの作品である「ラ・ボルドーナ」「N. N.」「ダンサリン」等、力のこもった演奏が良い。「ケハス・デ・バンドネオン」はコントラバスとバンドネオンの演奏が続き、全合奏になったと思うとすぐにコントラバスとバンドネオンに変わり、終曲近くにヴァイオリンのソロ、そしてフィナーレへと続く。何よりも斬新なアレンジが素晴らしい。J. マシエルの歌う「センチミエント・ガウチョ」も味のある歌い方で仲々良い。1989年にバンドネオンのピクトル・ラバジェンが若手のアレハンドロ・サラータに替わり、1989年と91年に来日公演を行ったが、メンバーの高齢化のためか精彩を欠くステージであった。セステート・タンゴのLPやCDは良いものが多いが、私の愛聴盤としてはデビュー盤のRCA SHP-6026 である。



わたしなりに、愛聴盤と思しきものを選んでみたが、タンゴの最盛期である1920年代のものが一つも無い。私がタンゴを聴き始めたのは1960年頃からであり、1945年以降に活動している演奏者や歌手を対象としてレコードを聴いていたので、このような結果となった。1920年代は、素晴らしいタンゴが沢山作られ、優れた演奏家や歌手が輩出した時代であり、タンゴの黄金時代と言われていた。残念ながら私にはこの時代のタンゴを聴く機会が少なかった。近年、大岩祥浩氏がSP音源をAMPレーベルでCD化されたので購入して60枚ほど所持しているが、30年代から50年代のものが多い。好みの問題だが、1960年代からタンゴを聴き始めた私にとっては、10年代、20年代のものより、各楽団の演奏が個性的になった1940年以降のものが好みに合う。

アルゼンチンタンゴのもう一つの楽しみ

CDDJ

松林隆道（川崎市）

私のアルゼンチンタンゴ（以下アルタン）との付き合いは、長いブランクと情熱の濃淡はありましたが、約50年になります。最初は「聴く」のみでしたが、徐々に「踊る」が加わりました。次に「演奏する」ということができれば良かったのですが残念ながら実現できていません。そのかわり、アルタンについてもう一つの「楽しみ」が増えました。



■アルタン文化

「アルタンの楽しみ」について、つぎのような様々な楽しみ方があるように思います。

- ・聴く
- ・踊る
- ・歌う・演奏する
- ・写真・映像に記録する
- ・レコード類・各種文献を収集する
- ・作曲・作詞・訳詞・採譜する
- ・歴史研究（楽団・演奏者・歌手・作詞家・作曲家・歌詞等）する
- ・アルタン関連ニュース・新譜記事・単行本等を作成・発行・紹介する
- ・その他（ミロンガ開催、タンゴ旅行、選手権参加、スペイン語学習等）

このような「楽しみ」を趣味としている人、趣味が発展して生業となっている人等、様々な状況があると思います。多くの楽しみが、それぞれの分野で趣味や生業として熱狂的な愛好者ネットワークを育み、この様々な活動が、相互作用しながら日本のアルタン文化を支え、発展・普及・伝承していることを実感するこの頃です。

■アルタン文化と私

私は、この多くの楽しみの中「聴く」「踊る」を主体に楽しんできました。

ミロンガ（踊り場）で快いタンゴ演奏を背景に、着飾ったミロンギータとアルタンを踊れることは、至福の時間です。ワインの香りが漂うミロンガは、超お気に入りです。私は、永らく社交ダンスのステップでアルタンを踊っていました。アルゼンチンの楽団と共にやってくるショウダンスしか知らない私は、アルゼンチンタンゴ・ダンスは、観るものとして全く別世界の存在に見えていました。

1995年頃「フリオ&ミキ」によるサロンダンスを見る機会があり、この時アルゼンチンタンゴ・

ダンスの神髄に触れたようです。社交ダンスのタンゴをもっとうまくなりたいたいと思っていたにもかかわらず、あっさりと社交ダンスから決別し、アルゼンチンタンゴ・ダンスの世界に飛び込みました。

しかし社交ダンス主体の世の中で、指導者も限られ、踊れる愛好者も少なく、ミロンガの場所もなく、情報も少なく、当時の先駆者が、大変な苦勞されたことが想像できます。当時市内には、アルタンだけを踊れる場所は少なく、社交ダンス・パーティで利用されるダンス・フロアのあるホテルで、10数名で何度か合宿し、レッスンやミロンガをささやかに楽しみました。

それが現在は、毎日・毎晩アルタンのレッスンがあり、さらにミロンガがバッティングするほどあり、ミロンガのハシゴも可能となりました。また踊り手達も増え、広く・立派な会場で、大勢で踊れるミロンガができることは、まさに「驚き」です。

■もう一つの楽しみとしての「CDDJ」

現在、私は、TANGOスエニョスで約7年間、DJをしています。

TANGOスエニョス（アルゼンチンタンゴ愛好会）は、タンゴ・ミロンガ・ワルツで踊るサロンダンスを楽しむ会です。ミロンガでは、素敵な音楽と踊り手達が、気持ちよく踊れる環境が、求められます。そのためには、会場の広さ・明るさ・雰囲気、音楽・交通の便・参加費・ダンス時間帯、参加人数と男女バランス、適度な飲食提供など様々な条件が必要です。

この中で特に忘れてはいけないものは、背景に流れる「音楽」です。この音楽の選曲次第でミロンガの盛り上がりや雰囲気が全く違ってきます。

DJ（disc jockey）とは、主にダンスホール、ディスコ、クラブ、野外ライブなどでレコードやCD、近年ではパソコン内に保存された音楽データを使用し、場の雰囲気から選曲し、切れ目無くかける者である。（ウィキペディアから一部引用）

DJ方式は、下記2種類のスタイルがあります。

・「静的スタイル」：掲示した選曲リスト（曲名・演奏楽団・歌手等）のとおり、CDに登録したものを、淡々と演奏進行するCDDJというスタイルです。

DJは、事前に演奏曲を選択し、ミロンガ用CDと選曲リストを作成します。

・「動的スタイル」：DJは、予定していた選曲で進行し、ミロンガの雰囲気に合わせて適切な曲に途中変更するスタイルです。主にパソコンで対応しますが豊富な経験がないと難しく、スエニョスでは、この方式は採用していません。

TANGOスエニョスは、4回／月のペースで約10年間、ミロンガを開催しています。現在4人のDJが輪番制で1回／月で担当しています。担当DJは、それぞれの好みやスタイルで選曲するため、ミロンガの雰囲気が相当異なります。その結果、4人4様のCDDJとなり、ミロンガ参加者は、異なるスタイルで幅広く楽しめることになります。各DJは、向上心を持って毎回競ってCDを作成しています。

■ブエノス方式の基本ミロンガ・スタイルとDJ

本場ブエノスのミロンガでは、参加者が気持ちよく様々なパートナーと踊るため、基本となるミロンガ・スタイルをもっています。それが「タンダ」と「コルティーナ」という仕組みで運用されています。

●「タンダ」：オルケスタ、年代、歌手等でセット化され、同じ曲種（タンゴ、ミロンガ、ワルツなど）で、大体3～5曲くらいで1セットを構成しています。タンダの例として、「ダリエソ

の1930年代の演奏を集めたタンダ」、「ワルツを集めたタンダ」とか同じ曲調のものを集め、そのタンダを踊りたいかを見極める重要な情報です。

踊り手は、パートナーと原則1タンダを最低限踊り切るのが礼儀だとされております。踊り手は、第1曲目を判断情報とし、「私の好きな曲調は、このタイプです。一緒に踊りませんか?」ということで暗黙に誘い、「相互了解」でカップル成立となります。従って、タンダの選択は、踊り手にとって重要で、タンダが気に入れば問題がないですが、合わないときはその間お休みとなり、曲に不慣れな場合は、少し困ることになります。

特に問題なのは、アルタンは日本でまだ日常的な存在でないため、曲調を幅広く深く理解している人は、あまり多くないのではないのでしょうか?このため、日本人DJにとっても、タンダ構成は悩ましいものです。当然名曲のみを連ねても、ミロンガとしては不適なものもあります。この辺がDJとして選曲のセンスと面白みであり、悩みです。

- 「コルティーナ」:ブエノスのミロンガでは、タンダ間にコルティーナ(幕、カーテン)と呼ばれるタンゴ以外の短い曲がかかり、この曲が流れた場合、全員がフロア中央から退出しなければなりません。その後、新たな相手を選択することが慣習となっているようです。このコルティーナにより会場をシャッフルし、また新しいカップルが誕生する仕組みとなっているようです。
- ここでDJは、タンダ毎の選曲で勝負することになります。DJの腕によりミロンガの経営にも大きな差が出てくるといわれているようです。

■私のCD作成方針について

私のCD作成方針は、あまりブエノス方式にこだわらず、趣の異なる多くの楽団を登場させ、様々なバリエーションとメリハリを楽しめる選曲をめざしています。

- ・演奏曲目リストは、曲名、演奏楽団と歌手名を見やすい場所に掲示する。(全員共通)
 - ☞ タンゴ情報普及のため、DJ全員が実施継続している。
 - (掲示した曲目リストの前で、内容確認と様々な会話が発生している。)
- ・コルティーナ方式は、採用しない。(全員共通)
 - ☞ これまで問題はなく、苦情もない。自由度がある。
- ・ブエノス方式のタンダはとらない。(松林のみ)
 - ☞ 一人のパートナーを想定して、4曲で構成する仮想タンダ形式を採用している。
 - ☞ 仮想タンダ内の曲構成は、タンゴ3曲と4曲目はワルツ、または、ミロンガとする。
 - どの段階からもダンスが開始でき、タンダの区切りを明確化している。
- ・その他のポイント(松林のみ)
 - ☞ リズムが明快で安定し、演奏時間が4分以下のものを選曲する。
 - ☞ 演奏年代は、年代的に偏らず、新旧適切に混合配置する。
 - ☞ 演奏楽団は、オーケスタ/コンフントを交え、多様な楽団で変化を味わう。
 - ☞ 曲調は、明/暗、軽/重が異なる曲調のものを交互配置し、雰囲気の違いを楽しむ。
 - ☞ 演奏テンポは、異なるテンポの曲を交互配置する。
 - ☞ 仮想タンダ内には、歌唱付きなものを1曲以上選曲する。
 - ☞ お馴染みの有名曲ばかりでなく、個人的な推奨曲を2、3挿入し、マンネリ化を防止する。
 - ☞ 選曲は、前回の約半分入れ替え、新陳代謝を図りながらスタイルを継続している。

・固定曲の配置（松林のみ）

☞ DJのこだわりで、開始曲（「サルードス」：ホルヘ・アルドゥー）と最終曲（「チケー」：オスバルド・プグリエーセ）という固定位置・固定曲で、始末を判りやすいようにつけている。

☞ さらに、毎回異なる楽団による「ラ・クンパルシータ」を選曲し、多様な演奏スタイルを楽しむように選曲している。

■CDDJとしての感想

1ヶ月毎にやってくるミロンガ用CD作成は、「踊る」、「聴く」だけの世界とは異なる新しい楽しみ方を提供してもらったように思っています。ミロンガ参加者が如何に楽しく踊り、また来たいと思うようなDJをめざしています。

約50曲程度を選曲するためには、全曲の流れ、仮想タンダの構成、前回の選曲等を考慮し、さらに前述したようなポイントを満足させるように選曲します。候補となる幾つかの楽曲と楽団をこの流れの中でフィットするか、前後関係はどうか、踊り手達がどうという点で喜ぶのか、何度も聴いて比較検討することになります。

CDDJ担当日は、ミロンガの雰囲気から、「テンポが早い」「リズムが取れない」「気持ちがいい」とか参加者の意見や感想を聞き、その反省と経験を蓄積して、次に活かすようにしています。DJの難しさは、無限の組み合わせの中からの最適解選択といえます。

趣味としてのDJでも気を使いますが、商売としてのDJは、大変だなと思います。最近、アルタンを聴く場合、踊りやすいのか？ リズムはどうか？ 曲調はどうか？ というようにDJ指向の聴き方となり、もっと大らかに聴きたいなと思っています。ということで趣味のDJは、常に追いかけていられるような大きな負担となりますが、何度も真剣に聴き比べるため、よい勉強となり、新たなタンゴの趣味拡大となっています。

さらに、悩みながら作成した自作のCD演奏で踊れることも、大きな喜びです。

いずれにしても、尽きることなく存在するアルタンを聴き、時間的な余裕ができた現在、「すいよう会」「日本タンゴ・アカデミー」、「NOCHERO SOY」3ヶ所のレココンに参加し、また様々なミロンガに足を運び、タンゴの魔界に引きずり込まれています。

古賀政男のタンゴCD化

既にご存知の方々も居られると思いますが「読売新聞」6月21日付の記事です。Tangueando en Japón 第32号65頁所載の島崎会長記事もご参照ください。

古賀政男の代表曲タンゴに
戦前アルゼンチンで録音、CD化

作曲家の古賀政男が戦前、アルゼンチンに渡り、現地の音楽に代表曲を演奏してもらった録音が「古賀政男 究極カバー」水越誠指揮、古賀メロディ「テイイチウ」で初CDされた。

古賀は1938年11月から約1年間、戦前アルゼンチンで録音した高橋正人氏は「日本人の心に響く、古賀メロディ」が、タンゴの感情と通じ、これを示す録音。これは前々地球の裏側で日本の音楽が鳴っていたことも知ってほしいと話す。

歌で録音に参加したミルナ夫人青広で「聖堂ソフティ」の3つでコントを寄せた。日本の方たちが作品を思い出し出されて感謝でいっぱいです。『女の歌』の録音は驚き、『女の歌』とマリオンとアノと通じた美しい思い出です。古賀氏はとても親切で感じの良い人でした。

なお、古賀政男音楽博物館（東京都渋谷区上原）では、企画展「古賀政男アメリカへ 昭和13年14年の約米録」を開催中。本誌発行人宇賀は「予選していた企画展とCD化が偶然重なり、縁を感じる」と話す。7月31日まで。03・3460・0011。

私を魅了した タンゴダンス・イン・シネマ

鈴木啓子（東京・世田谷区）

私のタンゴ・ヒストリーは1997年のある日、渋谷で一本の映画を観たときからはじまった。それは『タンゴ・レッスン』という英国のサリー・ポッター監督の作った映画で、観終わった瞬間に私は隣りにいた友人に「タンゴをやる！」と宣言していたのだ。

それまでクラシック、ジャズ、ロックをはじめとして、ファドやボサノバ、シャンソンなどあらゆる音楽を聴いていたのだが、タンゴはどうも苦手一度もきちんと聴いたことがなかった。ところが『タンゴ・レッスン』で使われていた、ピアソラの「リベルタンゴ」が私の胸をワクワクさせ、画面の中のタンゴダンスが私の足をムズムズさせた、つまりタンゴ音楽とダンスに同時に魅了されてしまったのだ。

映像と音楽の力はすごいと思う。映画の中のワンシーンが音楽と一体になって、何十年たっても人の心をときめかせ、その人の一生をいろどってくれる。『ウエストサイド物語』のタイトルバックにバーンスタイン作の序曲が流れたときの感動はいまだに新鮮だし『死刑台のエレベーター』で使われたマイルス・デイヴィスのジャズも忘れがたいし『鬼火』のエリック・サティのピアノ曲も鮮烈だった。誰の記憶のなかにもそういう体験がたくさんしまわれているだろうが、その音楽を聴いた瞬間に映画のシーンが頭に浮かんでくるのだ、その画面を見ていた自分の心のドキドキとともに。

『タンゴ・レッスン』の映画を観た日から数年たっていたが、仕事が一段落したのを機に私はアルゼンチンタンゴのダンスを習い始めた。それ以来、よりよくタンゴを踊るためにさまざまなタンゴ音楽を聴くだけでなく、タンゴが出てくる映画を探し出しでは観るようになった。今回はタンゴが出てくる映画といっても、タンゴショーやコンサートのライブ映像などは除いて、劇映画の中で印象的に使われているタンゴダンスをいくつか紹介したいと思う。

①タンゴそのものをテーマにした映画

『タンゴ／ガルデルの亡命』は1985年フランス・アルゼンチン合作映画で、フェルナンド・E・ソラナス監督。アルゼンチンからフランスに亡命した人々の望郷の思い、男女・親子の愛、そし



て明日への希望を描いたミュージカルふうの作品だ。アストル・ピアソラが映画音楽を担当しているが、ガルデルの歌やプグリエーゼ楽団の演奏などもいろいろ挿入されている。ファーストシーンでセーヌ河のほとりで主人公マリー・ラフォレが恋人と踊るタンゴが哀切で美しい。

『タンゴ・レッスン』は1987年イギリス・フランス合作映画で、脚本・監督・主演のサリー・ポッターは自身の経験をもとに、タンゴダンスに魅せられた女性映画監督がダンサーであるパブロ・ベロンとの恋を通じて生きること愛することを探っていくという、どこまでが実体験でどこからがフィクションかわからないようなストーリー。なによりも映画の中で使われている音楽の選曲がすばらしい。ウーゴ・ディアスのハーモニカによる「悲しみのミロンガ」に始まり、プグリエーゼ楽団の「ガージョ・シエゴ」「ラ・ジュンバ」ファン・ダリエソ楽団の「ペンサーロ・ビエン」「エル・フレーテ」などなど。中でも印象的なのは、小雪の舞う冬の夜にセーヌ河のほとりで主人公の2人が「恋とジェラシー」のワルツに乗って踊るシーンと、雨がザーザー降るブエノスアイレスの街角で「わが愛のミロンガ」をジーンズ姿の2人が踊るシーンだ。どの場面をとっても映像と音楽がみごとにマッチしていて、この監督のタンゴに対する愛情と音楽センスの良さが感じられる。そして圧巻はピアソラの「リベルタンゴ」を男3人女1人で踊るシーン。振付はパブロ・ベロン自身だが、どうやったら4人があんなにうまく組み合わせさせて踊れるんだらうと、DVDで何度もくり返してこのシーンを見たものだ。

続いて『TANGO タンゴ』は1998年スペイン・アルゼンチン合作映画で、カルロス・サウラ監督・脚本。音楽はラロ・シフリン、振付はファン・カルロス・コベスが担当している。タンゴの舞台の演出家である主人公を演じるのはミゲル・アンヘル・ソラ。新作の舞台のために踊り手をオーディションしたり、ダンサーである別れた妻に未練があったり、若いダンサーに恋をしたりするのだが、夢想の世界と現実の世界が入り混じり、愛と嫉妬、情熱とあきらめ……ソロダンス、男と男、男と女、群舞……さまざまなタンゴが踊られるが、昔ながらのダンスホールでの踊りもあれば、モダンダンスと融合したような現代タンゴもあり、映画でしか表現できないようなスケールの大きいダンスも踊られる。ビットリオ・ストラローの撮影による斬新な映像美とともに、見ごたえのあるダンスが堪能できる映画だ。



②タンゴダンスが効果的に使われている映画

1977年公開のイギリス・アメリカ合作映画『ヴァレンティノ』は、鬼才ケン・ラッセル監督が、ハリウッド映画草創期の superstar で31歳で死亡したヴァレンティノの半生を、フィクションを交えながら綴ったものだが、主演は1993年にエイズで亡くなったロシア人のバレリーナ、ルドルフ・ヌレエフ。『黙示録の四騎士』(1921)の中でヴァレンティノがタンゴを踊るシーンもちらっと出てくるが、冒頭、有名になる前のヴァレンティノが若い男性ダンサーと2人で踊るシーンの、バ

レエ風の味付けをされたタンゴがなんとも優雅でエロティック。

1992年のアメリカ映画『セント・オブ・ウーマン／夢の香り』はマーティン・ブレスト監督。この作品でアル・パチーノはアカデミー主演男優賞を受賞しているが、人生に悲観した孤独な退役軍人の矜持を表現した彼の演技はほんとうに素晴らしい。この中で盲目のアル・パチーノが「ボル・ウナ・カベサ」の曲に合わせて、若く美しい女性（ガブリエル・アンウォー）とホテルのレストランでタンゴを踊るシーンが印象的である。



1997年公開ウォン・カーウァイ監督の香港映画『ブエノスアイレス』は、香港からブエノスアイレスに旅をするゲイのカップルの話なのだが、レスリー・チャンとトニー・レオンが演じる、愛し合う2人の男のひりつくようなむき出しの心の葛藤と愛憎が、荒っばいカメラワークを通して迫ってくる。喧嘩をしたあと、狭い部屋の中で仲直りした2人が抱き合っただけで踊るタンゴがなんともセクシーで、見ていてときどきしてくる。振付は『TANGO タンゴ』と同じフアン・カルロス・コペス。

2001年公開のミュージカル『ムーラン・ルージュ』はバズ・ラーマン監督のアメリカ映画。舞台は1900年のパリ、キャバレー・ムーラン・ルージュで働くニコール・キッドマン演じる踊り子と、ユアン・マクレガー演じる若き作家のラブストーリーが、ビートルズやエルトン・ジョン、マドンナの曲などにのせて綴られる。振付はジョン・オコネルだが、스팅作詞作曲の「ロクサーヌ」の曲で大勢のダンサーたちがタンゴを踊るシーンが圧巻である。豪華絢爛な舞台装置や派手な俳優たちのアクションに目が行きがちだが、ダンスそのもの、特にタンゴの踊りに注目して見てほしい映画だ。

ジョン・オコネルは2004年のアメリカ映画『シャル・ウィ・ダンス？』（ピーター・チェルソム監督）でも振付を担当しているが、周防正行監督の日本映画のリメイク版の中で、ジェニファー・ロペスとリチャード・ギアが深夜のダンス教室で踊るタンゴはこの映画の中で一番印象に残る。使われているのはGOTANプロジェクトの「サンタマリア」というモダンタンゴ。社交ダンスの映画なのに、最も観客にアピールしたのはこのアルゼンチンタンゴのシーンだということのちょっとした皮肉な話である。

『愛されるためにここにいる』は2005年のフランス映画で、監督はステファヌ・ブリゼ。仕事にも家族関係にも行き詰まり、人生に疲れた中年の主人公ジャン・クロードが、たまたま入ったタンゴ教室で若い女性フランソワーズと出会う。ぎこちない出会いから始まり次第に愛情が高まっていく様子が、2人の踊りに表現されている。踊りそのものよりもフランスのタンゴ教室の様子を垣間見ることができて面白い。

③ワンシーンが印象的な映画

1939年に作られたアメリカ映画『カッスル夫妻』(H.C.ポッター監督)は、20世紀初頭にフォックストロットを流行らせたカッスル夫妻を、フレッド・アステアとジンジャー・ロジャースが演じる伝記映画。この中でフラメンコ風のスタイルでアステアがタンゴを踊るシーンがワンカット出てくるが、やはりアステアらしく軽快で明るく、かつ品がある。

女性同士のタンゴというと必ず引き合いに出される『暗殺の森』(1970年ベルナルド・ベルトリッチ監督、英仏独合作)だが、ドミニク・サンダとステファニア・サンドレリが第二次世界大戦前夜の不穏な空気の中、パーティーで女同士でタンゴを踊るシーンはいまひとつ美しさとインパクトに欠ける気がする。

『イル・ポスティーノ』は1999年製作のイタリア映画で、監督はマイケル・ラドフォード。1950年代に祖国チリを追われた詩人パブロ・ネルーダが、イタリアのカプリ島に一時身を寄せていたという史実にもとづいた映画だが、貧しい漁村の高台にある別荘でフィリップ・ノワレ演じるネルーダが恋人とタンゴを踊るシーンがある。つかの間の幸せをさりげないタンゴダンスで表現しているのだが、このシーンも忘れがたい。

最後に2006年アメリカ映画の『レッスン!』。監督はリズ・フリードランダー、主演はアントニオ・バンデラス。実在の社交ダンサー、ピエール・デュレインの実話をもとにし、ニューヨークのスラム街にある高校で落ちこぼれ生徒に社交ダンスを教えることによって、人間としてのプライドと自信を持たせることに成功した教師の物語。バンデラスが生徒たちの前で踊るタンゴが迫力満点。映画の中ではヒップホップと社交ダンスが融合し、現代のダンスの方向性を考える上でいろいろ参考になるセリフも多い。これは今の時代に社交ダンスを踊る人、教える人にぜひ観てもらいたい映画だ。

この秋にはフレデリック・フォンテーヌ監督の『タンゴ・リブレ／君を想う』という映画が日本で封切られる。「男性同士でタンゴを踊る迫力のシーンは必見」という宣伝文句に惹かれるが、期待を裏切らない作品であることを願っている。(2013. 9. 11)

Amelita Baltar 2013年度ガルデル賞受賞

去る6月29日オペラシティを湧かせた“プエノスアイレスのマリア”公演(P-43の吉村俊司さんの報告記事参照)で衰えぬ魅力を聴かせてくれたAmelita Baltarが今年のカルロスガルデル賞(女性歌手部門)を受賞した。

音楽活動50周年を迎えての最新作CD AB50”El otro rumbo”(新しい道)は若手ロックシンガーたちとともに新たな方向性を探ったもの。受章を心からお祝いしたい。

(大澤)





「タンゴ・リブレ」という題名、ちらしのタンゴ・ダンスの格好良さ、刑務所で踊るタンゴという奇抜さにひかれて、ベルギー、ルクセンブルク、フランス3国合作の映画を観に行った。“タンゴ・リブレ”は、タンゴの曲でいえば“リベルタンゴ”を連想させる表現であるが、監督の意図するところを想像しつつ映画館へ足を運んだ。

ストーリーは刑務所の看守をし、週に一度ダンス教室でタンゴを踊るような平凡な生活を送っている独り身の主人公JCが、教室で魅力的な女性アリスと知り合う。アリスには15歳の子供がいる。アリスが面会をしに来たことにより、アリスの夫フェルナンとアリスの愛人ドミニクはある事件の共犯者で、二人ともJCが看守をしている刑務所で受刑していることを知る。フェルナンとドミニクの仲は良く、アリスを取り合う様子もないほど変な三角関係にある。JCはタンゴを踊るうちに奔放なアリスに惹かれるようになる。一方タンゴを踊るアリスとJCの仲に嫉妬を感じたフェルナンは、同じ刑務所に収容されているアルゼンチン人にダンスを教わるようになる。ドミニクを含む他の受刑者達もダンスに夢中になっていく。JCのアリスへの恋心は激しさを増し、自分の手をナイフで切ってアリスが看護師として働いている病院でアリスの手当てを受けるまでになる。さらにタンゴの魅力は受刑者達の欲望を刺激し、刑務所内という欲望のはげ口のない中で過ごさねばならない絶望から、ドミニクは自殺を図るが、なんとか一命を取り留める。この事件の後フェルナンは息子の出生の秘密を打ち明けてしまう。これがきっかけで皆の関係がぎくしゃくし、アリスはひどく落ち込んでしまう。そんなアリスを救おうと、愛する人のためにJCの取る行動は思わぬ方向へと展開していき、観客をはらはらさせながら意外な結末になっていく。最後は四角関係(?)を想像させる男女5人が、リブレ(自由な)世界を目指してゆく姿がユーモアを交え描かれている。

刑務所のダンス教師は言う、“タンゴは魂の踊りだ、誘惑と衝動、自分の本姓が表れる”。まさにそのとおりタンゴに魅せられた男と女を衝動的な行動に走らせ様々な制約から解放していく。タイトルの“タンゴ・リブレ”であろう。

この映画の主な舞台となる刑務所内で、むさくるしい受刑者達が男同士で「El Llorón」の調べにのって踊るタンゴは、コミックさと哀愁とそこはかたない男の色気が感じられ、記憶に残るエンディング・シーンである。

『タンゴを上手に踊りたい』

池永博威 (東京・練馬区)

タンゴを初めて聴いてから50年になります。50年間飽きもせずにタンゴを聴いてきました。4年前から、あるいはもう少し前だったかもしれませんが、ノチェーロ・ソイの主催者の宮本政樹氏のお誘いでアルゼンチンタンゴダンスを習い始めました。練習会は月に3～4回の割合で開かれて、まだ仕事で現役の私も2～3回は練習会に参加するようにしました。そして2年前から練習会に若い新進の田中教景先生と人見亜樹先生をベアーでお招きして、1時間の講習を受けることになりました。



先生は大変熱心で、丁寧にわかりやすく毎回踊ることの基本に戻って一から教えてくださいました。私もできるだけ練習会に参加し、3月に仕事を退いてからはよほどのことがない限り練習会を休まないように心がけています。それでもタンゴが上手に踊れるようになりません。

アカデミーでは年間行事の一つとして、タンゴを聴くことが主体の会員と踊ることが主体の会員の融和を図る目的で、一昨年から年に1回ダンスパーティー（ミロンガといいますね）が開催されています。この企画が始まってから、多分会員諸氏にも秘かに心の中でダンスを始めようと考えている人が少なくないと思います。そこで、4年間ダンスを習っているながら何故私がタンゴを上手に踊れるようにならないのかその理由を探り、注意を喚起することが、ダンスを始める会員の皆さんに参考になるのではないかと思います、恥を忘れて筆を執った次第です。

☆練習が大嫌いです

私は、練習が嫌い、というよりも練習をほとんどしません。せっかく練習会に出席していろいろと上手に美しく踊る技を教えてもらっても、家へ帰ってから復習を兼ねた練習をしないので、技をミロンガで活用することができていません。私の練習嫌いはダンスに限ったことではありません。すべてのことに筋金入りです。

私がゴルフを始めたのは大学1年のときです。すぐにコースに出て、かなり遠くから打ったボールがグリーンに乗って興奮したのを覚えています。「どれくらいやっているのですか?」「50年以上やっています」「いくつで回るのですか?」「70ぐらいです」「やはりお上手ですね!」「ハーフの数字ですが」これが50年以上続けている私のゴルフの腕前です。ゴルフをご存じない人のために簡単にゴルフについて説明を加えておきたいと思います。ゴルフは、決められた位置から決められた穴（これを1ホールといいます）に向かって玉（ゴルフボールといいます）を打ち、ボー

ルが穴に入ったら1ホール終了です。距離が異なる18ホールを回って（1ラウンドといいます）、何回打って1ラウンドを終ることができたかを競う球技です。できるだけ少ない数で回るのが理想です。ゴルフを始めたばかりの人は1ラウンドで130～150ぐらい打ちますが、始めて2年もすれば100～110ぐらいで回れるようになるのが普通です。ハーフは1／2ラウンドで9ホールなので、私が1ラウンドで打つ数は $70 \times 2 = 140$ です。50年ゴルフをやっているこの下手さ、練習をしないでラウンドを回るばかりなので然も有りなんの数字です。

ノチェーロ・ソイの練習会で寺本千栄子さん（愛称“寺ちゃん”ダンスがとてもお上手です。）に「なかなか上手に踊れるようになれないよ」と泣き言をいうと、「練習が足りない、100回踊って上手に踊れないのならば1000回踊りなさい、1000回踊っても上手に踊れないのであれば10000回踊りなさい」といつも叱咤げきれいされています。その通りです。返す言葉がありません。練習しないで上手にダンスを踊りたい、虫がよすぎるはなしです。

☆集中力に欠けています

あなたはタンゴを踊りたいのですか、それともダンスを踊りたいのですか、その様に尋ねられた時にあなたはどうか答えますか。もちろんタンゴを踊りたいのです、そのように言い切る自信が私にはありません。

私が大学生の頃には社交ダンスが流行していて、大学祭の時期になると学生バンドによるダンスパーティーがそこかしこで開かれていました。曲はラテン、ジャズ、ワルツ、ブルース、マンボ、ジルバが中心で、その頃好きになり始めたタンゴもときどき演奏されました。私も女子学生と一緒に踊りたいばかりに、そしてあわよくば女子学生と恋に落ちる淡い期待を胸に抱いてダンスを習ったことがあります。一人で行くのが恥ずかしかったので、仲のよい友達を誘って、一緒に代々木駅前にあるダンス教室へ通いました。教室へ入って、先生と向き合い腕を組んで胸を合わせた途端に、その美しさに目が眩み、胸の谷間から毀れるふくらみに目のやり場を失って、もうダンスどころではありませんでした。運の悪いことに田舎から出てきたばかりの友達は私以上に初心だったので、購入した8枚の練習券を使い終わったところで通うのを止めてしまいました。

好きな女性とダンスを踊りたい、信じあい、見つめあい、二人だけの秘密の語らいの中で、だれにも邪魔をされないで、タンゴの曲を聴きながら、それが私の夢でした。「お喋りをしないでダンスに集中しなさい」、宮本先生や寺ちゃんの声が聞こえてきます。

☆タンゴを舐めています

ダンスはリズムに合わせて手足を動かすだけ、タンゴは50年も聴いてきたのだから簡単に踊れるのではないかと、そう思って私は練習会に参加するようになりました。タンゴを踊ることがこんなに難しいとはつゆ知らないことでありました。

タンゴは4／8拍子の音楽です。突き詰めてみれば1／2拍子で、踊るのにもっとも簡単なリズムのように考えられます。しかし、いざ踊ってみると、なかなかリズムを正しく拾うことができません。正しくリズムを拾って足を動かしているつもりでも、リズムと足の動きが合わないことがしばしばおこります。彼女の足の動きに合わせて自分の足を動かすことは簡単ではありません。自分でリズムをコントロールできない足の動きが、彼女の足の動きについていけないのが道

理です。その上、足の動きにはサリーダ（ステップを始める）、オーチョ（8の字を描く）、ボラル（飛ぶ）、ヒーロ（回転する）、ガンチョ（足を絡める）、クニータ（揺り籠のように揺らす）があり、これらを組み合わせて踊らなければなりません。足の動きはもちろん、名前を覚えるだけでも大変でした。しかもアルゼンチンタンゴダンスはアブラッソ（抱擁の形）で踊るのが特徴です。タンゴは一人で踊るものではありません。二人の気持ちがぴったり合って初めて楽しく踊ることができるのです。

面に^{おもて}迸る情熱と奥に潜む哀愁の対比がタンゴの魅力です。タンゴを踊ることで、潜む哀愁を身体で感じて迸る情熱を体で吐き出すことができるのです。どちらが欠けてもタンゴダンスは味気ないものになってしまうのではないのでしょうか。

☆決まったパートナーがいません

ミロンガでタンゴを踊る人には、同じ二人がパートナーとして初めから終わりまで踊り続けている人と、いろいろな人と踊ってそれぞれ踊り方の違いを楽しんでいる人の二つのパターンに分けられます。どちらも、男性がパートナーとして女性を誘うのが原則で、女性から男性を誘うことはミロンガでは禁じられています。

タンゴを習い始めた頃には、ベテランの女性が優しく踊って教示してくれました。練習会では、男女で適宜パートナーとなって踊ることができました。初めてのミロンガでは、練習会で顔を合せている者同志が踊っているうちに時間が過ぎてしまいました。しかしだんだんと回を重ねていくごとに、知らない女性とも踊ってみたいくなります。声をかけて知らない女性を誘うためには大変な勇気が必要です。声をかけなければ踊らないでミロンガの一夜は終わってしまいます。「僕にも安心して踊ることのできるパートナーがいればいいのになあー!」、ときどき弱気の虫が顔を出します。

☆趣味が多すぎます

音楽、ゴルフ、手品、パチンコ、読書、旅行、絵画、映画、落語、麻雀、将棋、卓球、パドルテニス、そしてウインドウショッピング、私の趣味を数え上げれば切がありません。あれもやりたいこれもやりたい、あれにも手を出してこれにも手を出して、結局すべてが中途半端に終わってしまっているのではないのでしょうか。

奇術の発祥は紀元前のエジプト時代といわれています。カップと玉の記述が最初で、カップの中で玉が現れたり消えたり、カップからカップへ玉が移動したり、玉が小さくなったり大きくなったりする奇術です。ナイル川東岸のベニハッサンという村にあるエジプト第12王朝の墳墓の洞窟には、この奇術をしている人を描いた壁画があります。奇術師のことを「カルクラリウス（小石使いの意）」あるいは「アケタブラリウス（葡萄酒の杯の使い手の意）」と呼ぶのは、これに由来しています。インドや中国も奇術の発祥地として知られています。カップと玉の奇術は中国から仏教とともにわが国へ伝承されて、江戸時代には「しな玉の術」として演じられていたようです。

奇術のトリックとして多く使われるのは、心理的効果による錯覚です。大きなものを小さく見せる。曲がっているものを真直ぐに思わせる。長い時間を一瞬と感じさせる。人間消失、人体切断などはこれを利用したものです。機械仕掛けの代表的な記述には人体浮揚があります。暗示、

記憶、読心、腹話などは奇術のための大切な術なのです。専門的には、パーム（手に隠し持つ）、ミスディレクション（起きていないことを起きたと思込ませる）、フォーシング（自分の思い通りに相手を操る）などの技術が必要です。奇術は一種のごまかしです。だましであって、ひっかけです。大切なのは「遊びの心」です。だました方もだまされた方もともに楽しくなるのであれば、奇術は何の意味も持たなくなります。ダンスにも同じことが言えるかもしれません。

☆飛行機が怖くて乗れません

タンゴはアルゼンチンの音楽です。日本の盆踊りではありません。タンゴを上手に踊るためにも、アルゼンチンへ行って本場の踊りを見ておくことが必要だと考えています。ただし私はダリエンソです。飛行機が怖くて、私の地図には外国がありません。だから50年もタンゴを聴いていてアルゼンチンへ行ったことがないのです。しかしダンスを上手に踊るためにも、アルゼンチンへ行きたいと考えています。船で行くべきか、それとも意を決して飛行機で飛ぶべきか、いま私が抱えている大きな問題です。

☆男はつらいよ！寅さん

そうだよ、兄ちゃん。男はつらいのよ。男の役目は女を心地よく踊らせることなんだよ。かっこよく踊らないといけないよ！お兄ちゃんの踊りが恰好いいとお姉ちゃんの踊りも美しく見えるんだから。お姉ちゃんのためにも男は血の滲むような努力をして、上手に踊れるようにならなければね。そうだよ。兄ちゃん。男はダンスが上手でも下手でも好きな女に踊ってくれて自分から声をかけることができるのよ。お姉ちゃんの身にもなってみなよ。声をかけてくれたから気持ちよく踊らしてくれるのかと思ったら、この下手糞野郎、声なんかかけてきなさんな、一人で踊ってろ。そう言いたくもなっちゃうよな。でも、お兄ちゃん、男は度胸、どんどん申し込まないとパーチーは踊れないで終わっちゃうよ！それにしても女から男を誘ってはいけない、篋棒め。誰がこんなこと決めたんだい。男女平等のこの時代に男尊女卑も華華しい。アルゼンチンの男はそんなに亭主関白なのかねえ！でも女も笑って男の願いを聞いてやらないといけないよ。女は愛嬌、やさしいのが一番。「下手な男と踊りたくない！」、それを言っちゃおしまいよ。

そんなこんなで私のダンスは一向に上手くなりません。もちろん決まったパートナーもできません。すべての趣味を横においといて、ダンスの練習に集中するほど真面目でもありません。練習会では少しずつ高度な技術を習うようになって、益々パニックです。タンゴが上手に踊れるようになるのはまだ大分先のことのようにです。それでも私はダンスを続けます。いつの日か私のパートナーと踊ることを夢見て頑張ります。それに、こんなに楽しいことをおいそれと止めるわけにはいきません。

タンゴアカデミーの会員の皆様、楽しいですよ！早くダンスの練習を始めたほうが勝ちですよ。きっと上手な素晴らしいパートナーと巡り合うことでしょう。

タンゴスポット発見！

CAFE & RESTAURANT

YIRA・YIRA

ジーラ・ジーラ

西川 薫

埼玉県深谷市の国道140号線沿いに外観が山小屋風の“YIRA・YIRA”という店がある。場所は関越自動車道花園インターを出て秩父方面に1 km走った左側にあり、大きな高い看板が目印。扉を開けた2時すぎには歯切れのいいピリンチョが流れていた。店内は懐かしい昭和の雰囲気さを漂わせた佇まいで、コーヒーの種類も多く、料理もバラエティに富んでいる。経営者夫人のお話によれば本日で丸々開業22年になるそうだが、タンゴ愛好家であるご主人の方針でBGMは開店以来一貫してタンゴだけをかけてきたとのこと（CD）だ。店名について伺ったところ、最初はおっとポピュラーな曲（カミニートなど）を検討したが、タンゴに無縁な一般客への浸透度を考えて簡明な現在の店名にした由。社会・人生に鋭い批判を加えた歌詞は飲食業には馴染まないという声もあるが、人生悪いことばかりではなく、巡り巡って良いときも来ることに希望を託して命名したと言う趣旨のお話でした。ランチ・タイムは会話の邪魔をしないように音量を絞っているが、空いた時間帯には希望すればボリュームを上げてもらえそうである。

当方面に出かけるときは立ち寄ってみられてはいかがでしょうか。



カフェ・レストラン ジーラ・ジーラ

深谷市小前田541-1 TEL：048-584-5733

営業時間：11:00～21:00 定休日：月曜



“小雨（？）降る径”考



石川 正幸（東京・江東区）

学生時代、既に私はタンゴ・ファンではあったが、昔風のシャンソンも結構好きで、買ってみた1枚のオムニバスLPに、ティノ・ロッシ（Tino Rossi）が歌うこのヨーロッパ・タンゴが収録されていた。このLPを聴いているうちに、いつしか私はこの曲を口ずさむようになった。メロディーが気に入っただけではなく、文節が短く、かつ口を速く動かさなくてもよいメロディーと歌詞だからであっただろう。

以来、“小雨降る径”という邦題と原歌詞との関係について気にすることも無かった。

この関係を意識したのは、昨年9月30日、島崎会長がコメンテーターの第79回タンゴ・セミナー「ヨーロッパにタンゴの華を咲かせた英雄たち」^(注1)における「マリオ・メルフィー（Mario Melfi）楽団」による「小雨降る径」（“IL PLEUT SUR LA ROUTE”）を聴き終わった時である。「あれ？」と思った。その部分のメロディーは存在していたが、歌詞が歌われていない部分があったからである。そのことに気づいて、これは「小雨」ではない、むしろ「土砂降りの雨」だと思い至った。

そこで、この曲の、ティノ・ロッシが歌っていた原歌詞をみることにする。ただし、著作権上微妙な問題があるので、原歌詞を掲載せずに「直訳」したのみを下記する。訳注も参照頂きたい。

Le-livre.com
Il pleut sur la route
(AUCH IN TRÜBEN TAGEN)
TANGO CHANTE
Paroles françaises de
St. CHEANE KESSELY
Musique et Paroles originales de
Henry HEIMBERG
7^e et 8^e de TANGO la rue Pa7 La mie. Ré mie. La mie. Ré mie.
57 M7 La Pa7 La M7 La Ré mie. Ré mie. M7
L'orage est par. tout Dans un ciel de
La mie. Ré mie. Pa M7 La mie. La mie.
buse Mais l'amour se rit de tout
La mie. Ré mie. M7 La mie. La mie.
Elle(l) a dit ce soir Pour le(j)a te. ce. vult
Ré mie. M7 M7 M7 REPRIN
Cher moi tout chan. te l'ex. pel. Il pleut sur la
La mie. Pa7 La mie. Ré mie. Ré mie.
rou. te. La nuit en été. tu. te
La mie. Ré mie. M7
Dans la nuit j'é. ou. te La bruit de tes
La mie. Pa7
pâ. Mais rien ne ré. ou. te
Copyright MCMXXXV by H. BENJAMIN S.A.R.L. Paris H.B. 210 sur
Éditions H. BENJAMIN S.A.R.L. 10, A. 11, E.
27 rue de l'Écollequier Paris (14^e) Pour toute demande de reproduction
ou de renseignements s'adresser aux auteurs

曲名：「道に雨が降る」

1 道に雨が降る…

心は乱れている

夜の中に私は聴く

君の足音を

2 しかし何も反響しない

そして私の体は震える

希望は既に消え去っている

君は来ないのだろうか？

3 外は…風、雨

しかしながら、
もし君が私を愛しているのなら
それでもなお君は来るだろう
この夜

4 道に雨が降る

夜の中に私は聴く
それぞれの音に私の心臓はときめく
君は来ないのか？

5 雷雨が至るところ

泥の空の中に
だけれども愛は全てをものともしない
彼は言った 今宵
彼女を迎えるために
私の心の裡では全てが希望を歌っている

(この後に3と4とが繰り返される)

(訳注)

- 1) 「足音」および「それぞれの音」における「音」は“bruit (ブリュイ)”であって、これは騒音をはじめとした耳に不快な音をいう。因みに、耳に心地よい音は“son (ソン)”である。
- 2) 「雷雨」= “orage (オラージュ)”は、雷の稲妻も雷鳴も豪雨も含めた総体をいう。
- 3) 「彼」= “il”でなく「彼女」= “elle”と記載している歌詞もあるが、ティノ・ロッシは“il”と発音している。

以上のとおり、この歌詞は全5節からなる。第3節と第4節は繰り返されてそれぞれ第6節、第7節となる。そして「小雨」という語は一切見当たらない。

雨の強さについて言えば、第1節では、聴けば聞こえるような足音を希求しているのだから、「小雨」と言ってもよからう。第2節でも同様である。しかし、第3節に来ると、「外は…風、雨」となる。第4節では、風を伴った雨であるかどうか、どの程度の強さの雨であるかは判然としない。そして、第5節——「マリオ・メルフィー楽団」では歌われなかった——では、「泥の空の中の」の「雷雨」= “orage (オラージュ)”となる。その後、第3節と4節を繰り返して終わる。

ここで、雨の強さと主人公の心=cœur (クール)の状態との対応関係をみってみる。

第1節の小雨の際には心は乱れており、それに続く第2節の小雨では、体が震え、希望が既に消え去っている。しかし、第3節の「外は…風、雨」の際には、それでもなお君は来るだろうと希望をつないでいる。それに続く第4節の雨では、それぞれの音に心臓がときめくほど興奮している。そして、第5節の「泥の空の中の」の「雷雨」= “orage (オラージュ)”では一転して、愛は全てをものともせず、心の裡では全てが希望を歌っている状態となる。つまり、雨の強さと主人公の心の状態とは、言うなれば、相反しているのである。これは、一種の逆説である。

もう一つ、さらに大きな逆説がある。それは、オーストリア人のヘンリー・ヒンメル (Henry



Himmel)^(注2)が作曲したこのもの悲しくも清楚なメロディーに、一筋縄では行かないフランス人であるロベール・シャンフルリー (Robert Chamfleury)^(注3)が“bruit (ブリュイ)” = 風を伴う雨、雷雨 = orage (オラージュ) などという不快な音を表す語からなる歌詞を付けたことである。

で、これら逆説を以てシャンフルリーは何を表現しようとしたのであろうか？



なお、ティノ・ロッシでは上記の「直訳」とおりの歌詞であるが、“Yahoo! France”で調べてみたところ、上記第5節から始まり第6節、第7節（繰り返しの部分）を飛ばして上記第1節から第4節で終わる歌詞も定着しているようである。“Yahoo! France”によれば、この曲が作られたのは1934年であり、R. シャンフルリーが歌詞を付けたのが翌1935年で、ティノ・ロッシの歌が録音されたのは同じく1935年である。なお、ティノ・ロッシの録音の前に女性シャンソン歌手のリス・ゴーティ (Lys Gauty) が録音している。

さて、“Il pleut sur la route”という曲名が“小雨降る径”と訳され、訳詩の内容も例えば菅原洋一が歌っていたもので“静かな雨……”となっているのは、もの悲しくも清楚なメロディーの曲想がそうさせるのであろう。また、原歌詞全体の内容からは「こみち。ほそみち」であるかどうかは不明であるが、曲想がそれらを連想させるとともに「径」という漢字が「道」よりも視覚的に曲想に合っていることも、邦題に採用されたことに映っていよう。さらに、原題では「道に雨が降る」であるが、「雨降る径」とした方が「舞台が広がる」という感じが生まれ、かつ「座りが良い」ということもある。

以上のとおり、“Il pleut sur la route”と“小雨降る径”とでは曲名として内容に少し隔たりがあり、歌詞の内容とは異なっている。

…原歌詞の内容を踏まえつつ、この“Il pleut sur la route”を聴いてみれば、新しい発見、新しい感動が生まれるかも知れない…

(注1) 「タンゲアンド・エン・ハボン」第31号第21頁

(注2) ヘンリー・ヒンメル (Henry Himmel) はペンネームと思われる。ドイツ・タンゴの代表格である「碧空」の原語 = “Blauer Himmel” から明らかなように「空」だからである。“Yahoo France”によれば、彼は1910年生まれ1996年没の作曲家・作詞家である。また、彼はドイツ人ではなく、オーストリア人のようである。なお、Il pleut sur la routeの当初のドイツ語の題は“Auch in trüben Tagen (曇った日にさえも?)”である。

(注3) ロベール・シャンフルリー (Robert Chamfleury ; “Champfleury “との表記もあり) もペンネームである。“Yahoo France”によれば、本名は“Eugène Gohin (ウジェヌ・ゴアン)”と言い、1900年5月24日生まれ1972年8月14日没の音楽編集者・作詞家である。中南米のスペイン語の曲を多数訳してもいる。



チャカリータ墓参の旅



笠井正史（東京・武蔵野市）

2012年8月長年の念願が叶ってブエノスアイレスに行った。それまでにも何度かブエノスアイレス行きを考えてはいたが、会社勤めをしていた時期は予算的には何とかなくても時間がなかった。よく東南アジアを中心に安近短の旅行とかいうのを売り出しているが、地球の反対のアルゼンチンに旅行するにはそういう訳にはゆかない。一方、定年後は時間的余裕はできたが年々予算的には厳しくなるし、体力的な問題も生じてくる、ということもあり、2012年一念発起と言えば些か大袈裟であるが、毎年催行されているラティーナ社のツアーに参加することにした。

ラティーナ社にツアーの申し込みをして旅程表を見せて貰ったところ、何と毎日のようにタンゴダンスレッスンというのが織り込まれているのを見て「え、毎日ダンスをやらされるんですか」と訊ねた処、担当の鈴木多依子姉曰く、「ええ、皆さんそれが楽しみで参加されるんですよ」とのこと、「じゃあ、全くダンスの心得のない私なんか場違いですね」と言うと「折角の機会ですから、この際おはじめになっては」と言われ、とに角参加申し込みだけはすることにした。そこで重ねて「ダンスのことは了解しましたが、市内ツアーではチャカリータ墓地は入っていますか」と訊くと「勿論チャカリータには行きます」とのことので一安心した。

チャカリータ墓地というのは私がかねてより一度は訪ねたいと思っていた所で、ブエノスアイレスに行く以上は先ず以てチャカリータ墓地に行かなければ意味がないとまで思っていた。長年中南米音楽誌、続いてラティーナ誌を定期購読してきたが、タンゴの巨匠の訃報が出る度に、チャカリータ墓地に埋葬されたといった記事が書かれていたため、さしてお墓好きでもない私にもどんな所か関心があったのである。

さて、ラティーナのツアーには15名が参加したが、ダンス経験のないのは私ともう一人（女の方）で、13名は経験者というかミロンガの常連のようであった。私がダンスにさして関心がないのを訝かってか、「ダンスやらないのに何でこんな遠くまで来られたんですか」と訊かれ、わざと「お墓参りですよ」と言うと、殆どのメンバーは変なおじさんが妙なことを言っていると思ったようであった。

もっとも、中には「どなたかご親戚かご友人でもこちらに埋葬されて…」という人もいたので、要は長年タンゴとお付き合いしてきた自分にとって、ブエノスアイレス訪問でどうしても欠

かせないのはコリエンテス大通り348番地、カルロス・ガルデルの家、そしてチャカリータ墓地といった所へ行くことなのだ、ということの説明し、納得して貰おうとしたが、「ミロンガ人」というかダンス専門の人たちには、そうしたことはさして関心がないようであった。

私がチャカリータ墓地に拘った最大の理由は、あそこに建てられているオスバルド・プグリエセの記念碑に詣でることであった。1996年の7月に中南米音楽から、オスバルド・プグリエセがピアノを弾いている記念碑をチャカリータ墓地に建てるので寄付をしないか、との呼びかけがあり、他ならぬオスバルド・プグリエセの演奏姿を再現するとなればファンとしては是が非でもと思い、参加申し込みをしたのであった。

それから二年程して発起人代表の蟹江丈夫氏と中西環江氏から会計報告とともに記念碑完成の報告が届き、訪亜の折は是非チャカリータ墓地へ行って記念碑まで足を運ぶようにと書かれていた。同封されていた写真を見ると、なるほど生前のオスバルド・プグリエセの雄姿を彷彿させるもので、私としては何としても一度現地にゆかねばと思うようになった。その後、記念碑に寄付した者の名前を刻んだプラカが取り付けられたとの報告があり、自分の名前がああ巨匠の傍に刻まれているというのは、何とも言えない感激でもあった。そのことをたまたまブエノスアイレスに仕事の関係で滞在したことのある友人に話したところ、「そりゃあ、お祭りの寄付をした奴の名前が神社の境内に掲げられているようなものじゃないか...」との一言、タンゴを知らない者に話してもこの程度かと思ひ知らされた次第であった。

2012年8月23日（木、曇り）ラティーナの鈴木多依子姉とともにチャカリータ墓地を訪れた。私が予想していたよりも墓地は広く立派で、日本によくある、日が暮れたら幽霊が出てきそうなそれとは大違いで、一つ一つが小宅の趣のあるものまであり、流石チャカリータと感じ入った。最初に訪れたカルロス・ガルデルの墓というより、記念碑は等身大以上の大きなガルデルの立像が建てられており、献花の途切れることがないそうで、今なおアルゼンチンの人たちの心に生き続けている、言ってみれば「永遠に不滅」の存在を再認識させられた。カルロス・ガルデルは通りの名前にも、地下鉄の駅名にもなっているくらいであるから、お墓も当然誰もが知る名所のようなものと思われる。

カルロス・ガルデルを後にして、地元ガイドに案内されて待望の？オスバルド・プグリエセの記念碑へと足を運んだ。中南米音楽から送られてきた写真通りの巨匠がピアノを弾いている全身



像を目にしてやっとブエノスアイレスまで来た実感が湧いてきたのであった。私の身びいきもあるかも知れないが、墓地でひと際目を引く存在感は矢張りグラン・マエストロそのものなればこそと思った。プラカに目をやり、自分の名前が刻まれていることを確認すると、ラティーナの鈴木姉が親切な方で、ここは一番大事なところだろうからとデジカメで記念写真を撮って下さった。生涯の記念となる一枚である。

オスバルド・プグリエセ記念碑から少し歩を進めると、アグスティン・マガルディとアニバル・トロイロの墓所が並んでいた。マガルディはギターを、トロイロは当然乍らバンドネオンを弾いている像が彫られていた。プグリエセの像よりは小さいが、それでも生前の雄姿を見せており、この辺りまで足を運ぶ往年のファンに往時を偲ばせるには十分であった。カルロス・ディ・サルリもその近くにあったが何故かあの巨匠の墓所としてはやや寂しいくらいの小さなものであった。地元ガイドの説明では同じチャカリータの中でも、大中小のランクがあり、小の部類は壁に塗り込められている形式のもので、簡単に見つけることはできないとのことであった。とすれば、カルロス・ディ・サルリのお墓も別に小さすぎる訳ではないようであるが、日本であれほど高名をさせたマエストロにしては何か物足りない感じがしたのは私ばかりではないのではないかと思われた。それとも先に見たカルロス・ガルデルやオスバルド・プグリエセが別格で、その他のマエストロは如何に巨匠とはいえ、アルゼンチンではまだ記念碑が建てられる程ではないという認識なのかと考えさせられた。

それより何より、フランシスコ・カナロの墓所は何処か、と訊ねた時、くだんの地元ガイド氏が「ここにはないと思う」というので、「じゃあ何処か」と言うと、「さあ...」の一言で、がっかりしたと言うより、一体どうなっているの?という気がした。日本で長年タンゴとお付き合いしてきた身には、フランシスコ・カナロの名前は余りにも大きく、チャカリータ墓地の一等地にお墓があるだろうくらいに考えていたが、アルゼンチンではどうもそうではないようで、こうなのが日亜の違いかと、これまた考えさせられた。ガイド氏曰く「あの人はウルグアイ生まれだから、モンテビデオ辺りにあるのかも知れない」とのこと、「アルゼンチンが今日なおタンゴで食べている?のはカルロス・ガルデルやオスバルド・プグリエセのお蔭も勿論だけれど、フランシスコ・カナロ抜きには考えられない」というと、「そう言われればそうかも知れない」の一言であった。そういえば、カルロス・ガルデルの名前は大通りにも地下鉄にも使われており、オスバルド・プグリエセも目抜き通りの三叉路のような所に胸像が建てられていたが、フランシスコ・カナロ通りもフランシスコ・カナロ駅も全く見当たらなかった。若干寂しい思いを抱え、翌日タクシーに乗った折、運転士が割とタンゴに明るそうであったので、フランシスコ・カナロの墓所はどこかと同様な質問を試みたが、やはり「さあ...」の一言しか返ってこなかった。

何分、ツアーの中では時間的制限があるため、私一人お墓探しに没頭する訳には行かなかったが、アルゼンチンにはもう一度、フランシスコ・カナロは元より、ファン・ダリエンソやフリオ・デ・カロといった巨匠の墓所を訪れ、暫し感慨に耽りたいと思っている。

タンゴの歌詞をたのしむ会

「タンゴの歌詞はどのように作られる？」講演を聴いて

大澤 寛

連休が始まる4月29日の夜、恵比寿のN.N.スタジオで、第1部の高場将美さんの講演「タンゴの歌詞はどのように作られる？」そして第2部の峰万里恵さんのライブを聴いた。

“良い唄のタンゴを聴いていると歌詞の内容（＝スペイン語）には関係なしに良い心持になる”とよく言われる。同じ経験をお持ちの方々が数多くおられる筈だ。もちろん繰り返し聴いてその曲（＝メロディー）に惚れ込むことが第一なのだが、そのうちに何となく耳（＝脳？）が歌詞（＝言葉の持つ音の響き）の持つ心地よさに反応するのだろう。

“それは何故だろうか？”という問いに答えるのが今回の高場さんのお話なのだ。

配布された資料をそのまま転載したい誘惑を抑えて以下に要約してみる。目から鱗が落ちるような高場さんの表現的確さと判りやすさを出来る限り復元したつもりだが、文責はもちろん引用した筆者にある。

1. 歌詞は「詩」の一種であるが「歌われることに意義がある」
（洋の東西を問わず元々「詩」は朗読されるものだった）
2. スペイン語のポピュラー音楽とフォルクローレの歌詞は伝統的に、原則として「定型詩」でなければならない（パターンは色々ある。項目7を参照）
3. 要所で脚韻を踏んで「ことばのリズムのパターンに統一感の美しさをもたらす」という大前提に基づいて、さらに詳しい技術的な解説と実例が示される。
4. 先ずスペイン語の詩や歌詞の「音の最小単位」は「シラブル」（＝音節）である。
「音節」には必ず母音（アイウエオ）が一つ（単母音）または一つ以上（2重・3重母音）ある。母音の無い音節はない。そして日本語とスペイン語の母音の発音は、粗っぽく言えば同じである。即ち ア=A/a イ=I/i ウ=U/u エ=E/e オ=O/o これらの母音に子音がくっついて「音節」が出来る。正文法上は子音扱いの Y/y も発音は「イ」
5. 子音が母音にくっつく際のくっつき方や、母音が重なる・続く場合にそれらを切る・分ける（切らない・分けない）ための文法上のルールはあるが、「詩」や「歌詞」では「それらのルールを無視して作者が決める」
6. スペイン語の歌詞は「ひとつのシラブル（＝音節）が必ずひとつの音符に対応する」根本的に「歌詞の1シラブルは、メロディーの1音になる。歌詞の字余り、字足らずは許されない」フレーズ（＝歌詞の1行）の最後のシラブル（＝音節）にアクセントがある場合、そのシラブル

(=音節)は二つの音符に対応させることがある(タンゴではほとんど見られない)。また歌手が音を揺らせたり、細かく割る表現はあるが、上記のとおり、根本的に1シラブルは1音である。

7. 色々なパターンの中で、一番親しまれて来た枠組みとして「1フレーズ=書くと横に(横書きだから当然!)1行」が原則として「8シラブル=8音節」で出来ていて「4フレーズ=4行」で一つの単位(=纏まり)となるものがある。先ずその例としてÁngel VillordoのEl Porteñoが取り上げられる。出だしの4行を高場さんの説明資料に従って転写する。まさに歌詞の解剖である。なお音節を構成する主母音の下に数字を付けてみた(楽譜との対応も付記すべきなのだが割愛した)

```
/Soy. hi. co. de. Bue.No. sÁi.res./  
  1  2  3  4  5  6  7  8  (8音節)  
/po. r a.po.do "El. Por. te. ñi. to."/   
  1  2  3  4  5  6  7  8  (4はdo" Eの塊りが詩作上の1音節)  
/el. crio.llo. más. com.pa.dri.to./  
  1  2  3  4  5  6  7  8  
/ que e.n es.ta. tie.rra. na. ció / (1はque eの塊りで1音節)  
  1  2  3  4  5  6  7-8 (7と8はóを延ばして2つの音節)
```

高場さんの解説は続く。

上の表記は正しいスペイン語の書き方ではないこと。シラブル(=音節)の切れ目にピリオドを入れてある。アクセント記号は文法を無視して発音上必要な所に付けた(1行目のsÁi)。フレーズ(=行)の最後の母音にアクセントが来る場合、詩・歌詞ではその音を延ばして2シラブルに計算するので、そこに下線を付けた(4行目のció)。

そして2曲目のMi noche tristeでは8シラブル・10フレーズのパターンが紹介され、以下Buenos Aires, Mano a mano, Marionetas, Barrio de tango 最後はTristeza de la calle Corrientesなどを解説の後、貴重な音源で聴かせて貰った。

Mano a manoでは1フレーズが16シラブル(=8x2)という長いものが5フレーズで1節を形成し、脚韻の踏み方のルールが示される。この歌詞では第1・3・4行の末尾に来る語、そして第2・5行の末尾に来る語が、それぞれ脚韻を踏まなければならない。下記の下線部の1本線と2本線をご参照願いたい。これらの脚韻が何度も聴くと何となく耳に馴染んで心地よさが生まれる源泉の一つなのではないだろうか。

```
/Re.chi fla.do en. mi. tris. té.za. hoy. te e.vo.co y. veo. que has sí.do /  
/en. mi. po.bre. vi.da. pá.ria. so.lo u.na. bue.na. mu.jér/  
/tu.pre.sen.cia. de. ba.cá.na. pu.so. ca.lo.r en. mi. ní.do /  
/fuis.te. bue.na. con. se. cuén.te y. yo sé. que. me has. que.rí.do/  
/co.mo. no. qui.sis.te a. ná.die. co.mo. no. po.drás que.rér./
```

紙数の関係上これ以上引用を続けられず、峰さんのライブにも触れられないのが残念だが、声を大きくして申し上げたい“高場さん、もっと頻繁にこうした講演をやって下さい”。



河内&平田 ドゥオを聴いて

脇田 富水彦

ご存じ超ベテランの河内敏昭 (gt) と新鋭平田耕治 (bn) のタンゴ・ドゥオを聴く。両氏は共に日本タンゴ・アカデミーの会員である。新旧のコンビの出演は予想通りタンゴ・バー“エル・チョクロ”を満席にした。

河内敏昭がギターを構えると50年ほど前に来日したフェルナンド・テルと3年にわたり共演したライブをどうしても思い出してしまう、強烈な印象が脳裏に焼き付いている。

一方、平田耕治は師匠のカルロス・ラサリ直伝のバイタリティー溢れる若手バンドネオン奏者で人気が高い。この二人、祖父と孫のような年齢差があり、その労わりと可愛がりか実に微笑ましい。

この日のプログラムはまるで古いタンゴ歌集のページを捲っていくような内容、特にGricel、Griseta、Nací en Pompeya、Plegariaは他の楽団ではめったに聴けない曲目。演奏はといえば取ってケバイおかず（メロディーの空白部分を修飾音でうめる短いフレーズ）を付けずに真正面から原曲のコラソンを観客に訴える奏法、逆に誤魔化しが効かない。平田耕治はとても緊張したようだ。

そのうっ鬱憤を晴らすかのようにLa cumparsitaのエンディングで例のモレスコのバリアシオンを堰を切ったように一気に弾きまくったのは印象的だった。

(敬称略)

演奏曲目は次のとおり（弓田綾子さんのメモによる）

Gricel, Griseta, Amor y cielo, Nací en Pompeya, Canaro en París
Milonga triste, María Elena, El esquinazo, A media luz, Alma de bandoneón
Chiquilín de Bachín, Zamba de mi esperanza, Plegaria, El día que me quieras
La cumparsita, 【Otra】 Buenos Aires



(撮影：筆者)

第10回タンゴダンス

アジア選手権を観て

齋藤 富士郎・大澤 寛

6月22～23日の2日間に亘って開催された「第10回タンゴダンスアジア選手権」の決勝を観る機会を与えられた。場所は前年と異なり大田区民ホール・アプリコ大ホール。蒲田駅に近く交通至便。音響効果も優れたモダンな大会場。

会を重ねるごとに密度の高いものになっていることは、出場者そして各部門の上位入賞者の国籍の拡がり（今回だけを見ても韓国・台湾・フィリピン・インドネシアなど）を見れば判る。文字通りのアジア選手権である。参加者も増え続け今回は180人（90組）に上ったそうだ。

23日16時10分にサロン部門決勝（10組）が開始された。毎回のことだが、私たちは決勝進出カップルの絢爛たる輪舞（に見える）のステージをひたすら見つめるばかり。採点はどのようにして行われるのだろうかという思いが時々脳裏をかすめる。既に今回の大会の案内のチラシにサロン・ステージ両部門の採点基準が詳しく掲載されているので、ここでは重複を避ける。使用された曲は *Comme il faut*, *La yumba* 及び *El flete* の3曲。そして定刻通り16時25分からはステージ部門の決勝6組。各組それぞれが異なる思い入れの曲（*La bordona* から *Libertango* まで）に乗って鮮やかに踊る。観る方は楽しいけれど審査・採点は大変なご苦労だと思う。

N T A 会員の田中輝さんとそのパートナー秋山聡子さんのカップルも昨年に引き続きサロン部門に出場したが、準決勝で昨年より順位を4つ落としたという。“これだけの高いレベルの人たちに交じって踊れたのは幸せだ。来年もぜひ参加したい”と充実感を漲らせて語っていた。

各組の迫力溢れる踊りの後は17時45分からの生演奏によるミロンガタイム。常に30組以上のカップルがステージに上がっている。

生演奏の第1陣はオルケスタ・デ・タンゴ・ワセダの面々。Bn 3名（うち2人が女性）、Vn 5名そしてピアノとコントラバスが各1名という編成。主体は3年生なのだろうか。これほど優れた演奏をするのにどれだけ練習時間が取れているのか、頭の下がる思いがする。4曲目にワルツを1曲入れて6曲を全体にとっても踊りやすい演奏を心掛けていたのだと思う。そして次には



（撮影：齋藤富士郎）



提供：(株)ラティーナ ©酒井 透

文字通り脂の乗り切ったアウロラの登場。踊るより聴きたいという人々も多いただろうと思ったが、ステージ上のカップルの数は増えるばかり。

短い休憩の後は歴代チャンピオンによるデモ。第1回大会(2004年)サロン部門優勝の美影&有彩から昨年第9回のステージ部門優勝のPaso Han & Penínsulaの13組。使用された曲はYunta de oro(演奏はプグリエセ)El choclo(演奏はダリエンソ)およびLa cumparsita(演奏はディ・サルリ)の3曲。続いて

は2009年世界大会サロン部門優勝のHiroshi & Kyokoに始まりCristián y NaoおよびChizuko & Claudioが絢爛たる踊りを披露。

Chizukoの片袖がキモノのデザインも眼を惹くものだった。更に続いてはGaspar & CarlaがMala juntaなど2曲。そしてデモの最後はGloriaと審査委員長Eduardoのカップルの登場で2曲。かなり新しいアレンジのEl chocloに次いで、組まないで頭(オデコの部分)だけを付けてParque Patriciosを踊るという枯れた(?)芸で喝采を浴びた。

そして決勝の審査結果発表に先立つアルゼンチン共和国大使館のLuis Aregui公使の挨拶では参加者・審査員・主宰者への祝意表明の後、ユネスコの人類文化遺産であり異文化を繋ぐ道具としてのタンゴの重要性と日本が果たしている役割に触れ、このアジア大会から数多くの世界大会入賞カップルが誕生していることが強調された。

数々の特別賞(ベスト・エレガント・カップル、ベスト・ドレッサーそして将来性のあるカップルなど)の授与の後、いよいよ各部門の優勝者の発表となる。Eduardo審査委員長は“どのカップルにも優勝の可能性はあった。審査は困難を極めた”と述べ、出場者・審査員・オーガナイザーと観客への拍手を促し、サロン部門の優勝はHiromi & Natsu(使用曲はComme il faut)に決定した。そしてステージ部門の優勝者発表の前には“出場カップルは皆、チャンピオンになれる技量を備えていた”と再び審査の困難さを述べて、先ず審査員への拍手を求めた。結びの言葉は“タンゴとは出発であり、愛であり、決意のいる作業である”と締めくくった。ステージ部門の優勝は中澤源太&Mana(使用曲はChacabucando)のカップルに決定。

両部門の優勝者によるデモンストレーションなどの後、次回開催日も発表された。2014年6月7~8の両日。場所は今回と同じ太田区民ホール。主宰者・審査員・関係者のご苦勞は大変なものだろうが、これだけの国際色を備えた中身の濃い大会が継続して開催されて、出場者の中から世界大会の優勝者や上位入賞者が輩出するのは実に喜ばしいことである。

来年も大成功であることを疑わない。

(2013年6月24日記)

45年ぶりにピアノラ＝フェレルの最高傑作が蘇る

小松亮太『ブエノスアイレスの MARIA』

吉村俊司（東京・杉並区）

あまり安易に大仰な言葉を使うのはよろしくない、と思いつつもこう言わざるを得ない。歴史に残るコンサートだった。2013年6月29日の15時、東京オペラシティコンサートホール《タケミツメモリアル》で開演した『ブエノスアイレスの MARIA』である。

アストル・ピアソラとオラシオ・フェレルのコンビによる最高傑作に小松亮太が挑むこの公演、ゲストには女性歌手として45年前の本作初演の際に MARIA 役をつとめたアメリータ・バルター、語り手にはその初演を10歳で観たという現代最高の歌手の一人ギジェルモ・フェルナンデス、そして男性歌手にはベネズエラ人ながら2012年の小松亮太公演『エル・タンゴ』で圧倒的な表現力を見せた歌手レオナルド・グラナドスという素晴らしい3人を迎えている。演奏は小松亮太のバンドネオンと、Tokyo Tango Dectet と名付けられた10人編成のアンサンブル。メンバーは黒田亜樹（ピアノ）、田中伸司（コントラバス）、近藤久美子、谷本仰（バイオリン）、吉田有紀子（ビオラ）、松本卓以（チェロ）、井上信平（フルート）、鬼怒無月（ギター）、佐竹尚史、真崎佳代子（パーカッション）。小松は、ピアソラの初演以降に行われたピアソラ以外によるいくつかの本作の公演の記録を確認し、自分たちは「タンゴとしての『ブエノスアイレスの MARIA』を演奏すべき」という使命感を抱くに至るが、上記はそれを実現できる最適なメンバーと言えるだろう。

ご存じの方も多いと思うが、本来この公演は2011年3月19日に行われる予定だった（この時は女性歌手と語り手は今回とは別の人物）。しかし、その直前の3月11日にあの不幸な震災に見舞われ、結局は中止となってしまった、という経緯がある。それから2年余りの間には、参加予定だったコントラバスの松永孝義が逝去。他にもさまざまな困難がありながら、それらを乗り越えてようやく実現したのが今回の公演だったのである。ここに至るまでの小松や関係者の、執念とも言って良いほどの熱意に敬意を表したい。

難曲揃いの本作に挑むにあたって小松は、何度か日本人キャストによるライブも行っている。この時は女性歌



毎日新聞 2013年9月5日

手にSayaca、男性歌手にKaZZma、語りに片岡正二郎を迎え、歌はスペイン語、語りは日本語、という構成。中でも6月24日に東京・江古田のライブハウスBuddyで行われたライブは、本公演直前ということもあって異様な熱気に包まれた。Sayaca、KaZZmaの歌唱はオリジナルのアメリータやエクトル・デ・ロサスの世界に迫る一方、片岡の声を張った語りは、フェレールの落ち着いた歌うような語りとは異なる新たな表現を模索。演奏も十分な仕上がりで、このライブだけを聴いてもかなりの満足感が得られる内容となっていた。

そしてその5日後、ついにオペラシティでの本公演。ステージ上には演奏陣、その後ろの一段高いところに歌手と語りが並び立ち、いよいよ演奏が始まる。

アメリータは、彼女こそがマリア、という圧倒的な存在感でステージを支配。無名なフォルクローレ歌手から本作の主演に抜擢された45年前のハスキーな声はそのままに、その後トラディショナルなタンゴをレパートリーに加えてタンゴと寄り添って来た経験が加わり、より深い感情表現でマリアを演じた。

圧巻だったのが語りのギジェルモ。彼を歌ではなく語りに起用したことについて、事前にはやや疑問に思う気持ちもあったのだが、実際にその声に接し、今回の語りは彼をおいて他にはないということを確認した。抑制された哀しみからあふれる怒りまでを自在に表現して物語の進行を司って行くその声は、オリジナルのフェレールの語りをも超えている。

上記二人に比べるとややおとなしく、目立たない感のあったレオナルドだが、ひたむきで堅実な歌唱は役柄にもびったり。極めて味わい深い歌声であった。

小松と彼の率いるTokyo Tango Dectetの演奏は、ピアソラによるオリジナルの演奏を驚くべき精度で再現。これは単なる譜面上の精密さととどまらず、楽曲の根底に存在するタンゴのリズムのうねりと精神性、そして時折顔を出す大草原のフォルクローレの響きまでを表現しきったことによるものである。メンバー全員本当に素晴らしかったが、特に名前を挙げるとすればコントラバスの田中伸司、ピアノの黒田亜樹、ギターの鬼怒無月の演奏が強く印象に残っている。

そして、忘れてはならないのが字幕の存在。フェレールのシュールで難解な詩を的確に訳し、楽曲の進行に合わせてタイムリーに提示してくれた字幕のおかげで、音楽に没頭しながらも言葉をただ言葉として受け止めることができた。訳詩の比嘉世津子と字幕表示のスタッフも最高の共演者だったと言えるだろう。

第二部の中盤、レオナルドが歌う「精神分析医のアリア」と、黒田の素晴らしいピアノにのせてギジェルモが語る「小悪魔のロマンス」の2曲は、この作品の中でも最も美しい部分。続いて演奏陣全員が一体となって疾走する「アレグロ・タンゲービレ」で一気に盛り上がり、アメリータの渾身の歌唱「受胎告知のミロンガ」で興奮は最高潮に達する。最終幕「タンクス・デイ」の冒頭では一旦深く暗く沈み込み、そこから徐々に恐ろしいほどに緊迫感を増して行く。最後は救いのない輪廻とも未来への希望とも取れる結末。45年ぶりに完全な形で蘇ったマリアに対し、観客はスタンディングオベーションでそれを称える。歴史が作られた瞬間だった。

なお、本公演はライブ録音され、CDとして既にリリースされている（ソニー SICC-1644～5）。今後も繰り返しこの歴史的公演を追体験できる我々の幸運を喜びたい。

茨城県堺町の 「アルゼンチン交流80周年記念事業」 に参加して

中村尚文（東京・江戸川区）

埼玉、群馬、栃木の県境に近いところに、今回の会場となる茨城県堺町がある。こんな地方の小さな町が、何故南米の大国アルゼンチンと友好の歴史があるのか興味が湧くところです。

今年は節目の80周年行事として6月30日（日）に開催され、当日配布されたパンフレットには詳しく友好の歴史が記載されていました。簡単に説明申し上げますと、それは時代を遡ること160年の1853年、ペリーが浦賀に来航した際、一行の中にアルゼンチン人のモンテネグロ氏が居り、一方、迎える側の政府役人の一員として下総関宿藩の野本作次郎が居て、この二人が親交を深めたのが交流の原点です。その後80年時代は下って1933年にペリーの孫が来日し「浦賀来航当時に祖父と親交のあった人たちの子孫を探していた。それが契機となって野本作次郎の孫の作兵衛と、当時偶然にも駐日アルゼンチン公使であったアルトゥーロ・モンテネグロ氏（先述のモンテネグロ氏の孫）が出会い、作次郎・作兵衛の生地である堺町との交流が始まったのである。同氏は特に公使在任中には長田小学校に毎年奨学金を贈り、友好を深めた」というものです。

当日のプログラムは第一部「アルゼンチンの日の集い」では駐日アルゼンチン臨時大使のお話、児童達の劇、歌や合奏などが披露されました。第二部は「アルゼンチン・タンゴ・ショー」となり、チェ・タンゴ楽団の演奏に歌とバイレが加わりました。歌手は小島りち子の昔懐かしいレパトリーで「Mis noches sin ti」「Hasta siempre amor」など4曲。バイレは流石舞台映えのする間々田佳子とギジェルモの踊りも4曲。チェ・タンゴはメンバーも入れ替わり、若手が中核となった今回の演奏も全体的に緊張感とメリハリのある好演が続きました。閉幕後、臨時大使を含むアルゼンチン協会、日本タンゴアカデミーや出演者・関係者と場所を春日部駅前に移した二次会は和気藹々の内に名残を惜しみつつ散会しました。



ここにも美しいタンゴの世界があった

第16回「いたばしハーモニカタンゴ祭り」

大澤 寛

2013年7月14日の午後、板橋区立文化会館・小ホールで行われた「いたばしハーモニカタンゴ祭り」を聴いての印象は“ここにもこんなに美しいタンゴの世界があった。今まで知らなかったのは恥ずかしい”というものだ。NTA 会員の山下よし子さんとお弟子さんたち、そして山下さんのお師匠さんである小山實氏が主宰されるこのコンサートは今回で16回を数えるという歴史のあるもの。

10分の休憩を挟む2部構成の第1部は、お弟子さんとは言ってもそれぞれがセミプロ級の活動をして居られる高弟の方々に、中には国際大会のシニア・チャンピオンになられたという方もおられた。スタートは「SHARA」というグループ（男性2・女性3）の“El cóndor pasa（コンドルは飛んで行く）”にピアソラの“Libertango”の2曲。舞台後方のスクリーンには空を飛ぶコンドルのシルエットが浮かぶという演出。ついで山下さんの「ドレミ会」の皆さん10名がそれぞれ1曲。コンチネンタルタンゴ・日本の歌・ロシア民謡（いずれもタンゴに編曲されたもの）そしてアルゼンチンタンゴと言う構成。1曲目は“夜のタンゴ”そしてジャズ風の“サクラスイング”があり“荒城の月変奏曲”では再びスクリーンに月が浮かぶ。そして第1部の最後は小山氏編曲の“La última copa（最後の杯）”

そして第2部“小山實の世界”では、小山・山下のお二人がお揃いの黒いベレーをかぶって登場。お二人の上品で軽妙なトークを挟んで、アンコール2曲を含めて11曲が演奏された。山下さんの“愛の証し”（小山實・曲）に始まり小山氏の“El pañuelito”と“El choclo”そして山下さんの“La separación”（小山實・曲）が終わったところでNTAの島崎会長が登壇して、先ずこのコンサートの歴史と魅力を讃えたあと、手短かにNTAの活動を紹介して、お二人への質問に入る。

（島崎）山下さんがタンゴに拘る・タンゴに惹かれるわけは？

（山下）戦後間もなく銀座で藤沢嵐子さんのラ・クンパルシータを聴いて身体に電流が走った様な感動を覚えた。タンゴはこんなに日本人の心打つものなのに、その後次第に顧りみられることが少なくなって来た。何とも残念に思っってハーモニカでのタンゴに力を入れるようになった。

（島崎）（小山氏に）山下さんはどんな生徒でしたか？ 感心する点は？

（小山）ラ・クンパルシータをやりたいというので基本から始めた。生徒と言うより

いまやライバル。気迫がこもっている。良いところは可愛らしさ。

(島崎) 小山先生の今後の取り組みなどをお聞かせ下さい。

(小山) 10月にカーネギーホール出演が決まっている。ふとしたことから知人が決めてしまった。“荒城の月”を複音ハーモニカでやったのがTV やラジオで取り上げられて注目されたらしい。

2部のプログラムをご紹介して置く。筋金入りのタンゴ・マニアの姿が浮き彫りになる選曲ばかり。

“*愛の証し” “El pañuelito” “El choclo” “*La separación” “Nostalgias” “Felicia”
“Memorias de una vieja canción” “A media luz” “La cumparsita” (*印は小山實作曲)

お二人の短くて味のあるやり取りの幾つかを拾えば「曲忘れちゃったわ」「うまく忘れるのも芸の内」とか「La separación (別離) ってどんな意味?」「良い男のこと。“君の名は”を思い出しなよ」などなど。そして山下さんが転んで怪我をされ2年ほど闘病生活をされての復帰であることなどが語られたあと、万雷の拍手に応えての小山さんのアンコールは「アンコは売らないんだけど」と言う前置きで“El huracán”と“El adiós”の2曲。“El huracán”の台風の描写には嘩然とさせられた。

まさにあっという間に過ぎた時間。次回はもっと多くのタンゴ仲間を誘って伺いたい。

(2013年7月15日記)





上野の夜の森に響く……

ユリ・アスセナの歌声



弓田 綾子

夏の風物詩、不忍池の蓮が咲き誇る7月18日（木）夜、そのごく近くの上野池之端のライブ・ハウス「Qui（キ）」で、わが日本タンゴ・アカデミー会員の歌手、ユリ・アスセナのライブがおこなわれた。

満員の店内のアットホームな雰囲気は、彼女の飾りつけがなく、親しみに溢れた人柄を感じさせるかのように温かく、明るいうもどにつつまれ、今宵のライブへの楽しい期待がふつふつと沸いてきた。

見渡すと、当アカデミーの会員を含み70名ほどの客席の大半は女性で占められ、ワイングラスを片手に微笑をかわしながら、そのときを待った。

定刻と同時にステージにスポット・ライトが当たり、そこにエメラルド・グリーンドレスを身につけたユリ・アスセナが、満面に笑みを浮かべて登場、聴衆の盛大な拍手に応じて中央に立った。華やいたステージにそのシルエットが見事に映える。そのときだった、大向こうから大きく「ユリ！」の声がかゝる。熱気に満ちたライブはこうして始まった。

第1部のプログラムを記しておこう。

<Parte 1 >

1. AL MAESTRO CON NOSTALGIA (アル マエストロ コン ノスタルヒア)
2. VIDA MÍA (我が命の君)
3. FUERON TRES AÑOS (3年過ぎて)
4. MILONGA DE MIS AMORES (わが愛のミロンガ)
5. EL CHOCLO (エル チョクロ)
6. MOLIENDO CAFÉ (コーヒールンバ)
7. QUEJAS DE BANDONEÓN (バンドネオンの嘆き)
8. AQUÍ ESTOY, MARÍA (6月11日のマリア)
9. GARGANTA CON ARENA (砂混じりの喉)

以上9曲を、ときには彼女独特のユーモアに富んだトークをはさみながら、一気に歌い上げた。静かに聴き入るリスナーの心をグッと掴み、惹きつけていく歌唱法はさすがだ。

ここでのレパトリーはどちらかというとプロパーなものが多く、彼女ならではの構成になっ

ているが、圧巻は彼女の十八番でもある最後の「GARGANTA CON ARENA」だ。今は亡き名歌手ロベルト・ゴジエネチェに捧げたレクイエムともいべき哀惜極まりない曲調が、聴く者の心を静かに揺さぶって止まなかった。

彼女特有の、激しい抑揚をつけた下町風の歌唱法は、かなりの冒険でもあり、ややもすると品位をおとしかねないので、誰でもというほど簡単ではない。しかし、短期間ながらブエノスにも滞在して研鑽を積み、それを自らのスタイルにしてしまったというのは見事だ。

<Parte 2 >

1. POR UNA CABEZA (首の差で)
2. FUMANDO ESPERO (君を待つ間)
3. LIBERTANGO (リベルタンゴ)
4. TANGO NEGRO (タンゴネグロ)
5. CASCABELITO (小さな鈴)
6. LA CACHILA (ラ カチーラ)
7. EL AMOR DESOLADO (悲しみ嘆く恋)
8. SERÁ UNA NOCHE (いつの夜か)
9. PATA ANCHA (パタ アンチャ)
10. EL DÍA QUE ME QUIERAS (想いの届く日)

2部のステージでの彼女は、髪を後ろにまとめ、白のドレスでの登場となった。これが黒のワイシャツに赤いネクタイ姿の演奏者をバックにし、あたかも“3D”の画面のようにユリ・アスセナの姿を浮き立たせ、ライブ後半への期待をいっそう高めていった。

ここでは著名なレパートリーでほゞ固め、場内の明かりを落したなかで、次々に情感を込めてじっくりとした歌を聴かせた。この中で私の印象に残ったのは7番目の「EL



AMOR DESOLADO」だった。“……私があんなに愛したのに／あなたは私の許から去って行ってしまった／それを見るのが辛く私は自らの目を傷つけ命を絶つ／なぜならあなたを殺めないために……”、失われた愛の苦悩がレシタードを含んで、激しく、哀しく歌い上げられ、場内は静かな感動につつまれた。が、終わった瞬間、「5,000円は安い！」の声が上がり、場内は爆笑に包まれ、雰囲気は一気にユリ・アスセナ特有の明るいライブの雰囲気に戻った。

この日のバックは、早川純 (Bn)、吉田篤 (Vi)、須藤信一郎 (Pf)、田辺和弘 (Cb) の錚々たるメンバーで固め、実に見事なフォローを見せていたが、とくに吉田の音色には聴き入る人も多く、毎回惜しめない拍手が送られたのが印象に残った。

まずは大成功のライブと言え、今後なおいっそうの躍進が期待される。

「第16回東京バンドネオン倶楽部演奏会」
を聴いて

佐藤 進

9月16日小金井市民交流センターにて、第16回東京バンドネオン倶楽部演奏会が行われた。正午頃に関東地方を台風が通過したにもかかわらず、午後4時開演の演奏会場は満員の聴衆で埋め尽くされ、台風を吹き飛ばすような熱気に満ちていた。

演奏は東京バンドネオン倶楽部のアマチュア16名が交代で舞台に立ち、それを小松亮太ユニットが支えるという編成である。アマチュア・バンドネオン奏者は小松亮太の指導のもと練習を繰り返し、プロの演奏家を交えた厳しいリハーサルによって、プロも驚くようなテクニックとタンゴ演奏のフィーリングを身につけてきた。バンドネオン=小松亮太と早川純、ピアノ=松平裕平、バイオリン=近藤久美子、専光秀紀と原孝人、ピオラ=松本豊、チェロ=松本卓以、コントラバス=田中伸司という錚々たる奏者がサポートする大編成オーケストラである。ゲスト・ボーカルにKaZZma、SAYACA、ロベルト杉浦が出演した。

この日のプログラムは古典曲から1980年代の新しい曲まで広く網羅していた。演奏はバンドネオンはアマ4人だけという12人編成で「El Día Que Me Quieras」で開始された。若干の硬さは感じられるが、迫力のあるサウンドが響いてくる。開幕の演奏としては順調な滑り出しである。2曲目はアマ2人に早川純のバンドネオンによる11人編成で、KaZZmaの歌による「Los Mareados」、続いて同じ編成での演奏でSAYACAの歌う「Milonguita」が演じられた。この頃からアマ・バンドネオン奏者の固さもなくなり、日ごろの練習の成果が現れだした。司会の小松亮太も嬉しそうな表情で舌も滑らかに次の曲「Alfredo」を紹介し、早川純に代わってバンドネオンを弾いた。このように順次バンドネオン陣の組み合わせを変えながらアマ16人が1人数曲ずつ演奏した。アンコールを含め22曲が演奏されたが、うちアマだけのバンドネオンが7曲、残り15曲にはアマに小松亮太か早川純が加わった。演奏曲の一部ではパーカッションとギターが参加した。聴衆からの拍手が多かったのは予想外の曲で、バンドネオンはアマだけとはいえバンドネオン演奏のめりはりがうかがえた「La Guiñada」、オマール・バレンテの作品だけにピアノの美しさがひとときわがやえた「Generación 80」であった。「Canaro En París」や「La Cumparsita」のバンドネオン・パリエーションには日ごろの練習成果が感じられた。ゲスト・ボーカルではKaZZmaの「Zorro Gris」、ロベルト杉浦の「Balada Para Un Loco」、アンコールでのSAYACA



演奏を終えてくつろぐ小松亮太

撮影：筆者

の「Silueta Porteña」が光っていた。当初の予定にはなかったが友情出演でCarlos Rivarolaと桑原和美のダンスが演じられ、さらに特別出演の阿保郁夫の「Nocturno a mi barrio」の語りには拍手が鳴りやまなかった。全体として非常に充実した演奏が繰り広げられた上に、ゲスト出演者が華を添えて演奏会をいっそう盛り上げた。



フィナーレ” Silueta porteña” 会員奏者・ゲスト出演者全員
写真提供 三浦春雄氏

そして今回小松が意図したのは歌と踊りを加えた“ミロンガ”スタイルの紹介であったが、彼の意図したものが見事に実現されていた。

1990年代中頃からアマチュア・バンドネオン愛好家を指導し、定期的に発表の場を設けるなど、小松亮太のタンゴへの思いと熱意に感心しつつ家路についた。

藤沢嵐子さん逝去

本号の冒頭に島崎会長が哀悼の意を表しておられる「タンゴの女王」として一世を風靡した藤沢嵐さんが去る8月22日に亡くなられました。享年88歳。謹んでご冥福をお祈りします。

幾つかのメディアで報道されましたが、9月24日付の読売新聞朝刊「編集手帳」を転載します。

なおTanguendo en Japón 次号（来年1月発行）に西村秀人さんの追悼文が掲載される予定です

（編集部）

言葉 音 楽 界

編集手帳

南米には、年の取り方について、「老いる者と、若さを重ねる者がいる」という表現がある。『伝説のマエストロたち』という記録映画に教えられた◆アルゼンチンタンゴの全盛期に活躍した音楽家たちが、数十年たつて再びブエノスアイレスに集い演奏する。『若き日は過ぎ去った。君はもう戻らない』。歌声も伴奏も、瑞々しい◆先月世を去った歌手、藤沢嵐子さんも、古き良き時代にこの街で人気を博した。帰国して「タンゴの女王」と呼ばれたこの大御所は、新趣向の曲をレパートリーに加えていった。懐古趣味を満たすだけでは、後ろ向きすぎると思うの。60代に入り、音楽のパートナーでもあった夫の死から、立ち直ろうとしていた頃の言葉である◆ブエノスアイレスから70年、2010年夏季五輪「東京開催」のニュースが届いた時、年配の方には、日本で初めてオリンピックが開催された1964年当時の記憶が蘇っただろう。家族や友人の顔とともに◆懐かしさに浸るだけでなく、年下の世代と共に今後7年間の道のりを歩む。そのような気持の方をすれば、「若さを重ね」られるのではないか。

2013. 9.24

「藤沢嵐子オールタイム・ベストアルバム」2枚組（初復刻 17曲を含む全40曲収録）が10月30日に発売される。発行ユニバーサルミュージック合同会社
<http://www.universal-music.co.jp/fujiswa-ranko/>

「なごや蓄音機クラブ」発足!!



宮本政樹 (東京・江戸川区)

「Tangolandia 2011春」のNTA会報に「蓄音器に魅せられて」を執筆された四日市の勝原良太さんがこの度「なごや蓄音機クラブ」を発足させ、第二回目の蓄音機によるタンゴ名盤コンサートを9月28日(土)に名古屋市中区錦3丁目にある「巖本真理メモリアルホール」にて開催されました。勝原さんはNTAに入会する前後から短期間の間に1920年代の古典タンゴを中心にかなりの量を聴きこんでおり、40～50年前ならいざ知らず、今の時代にこれほど急激にのめり込むのは驚くべきタンゴマニアです。昔の一般的なタンゴファンはまず、カナロ、ダリエソ、ディ・サルリという過程の後にいろいろな楽団のタンゴへと移ってゆくが、早めに1920年代後半の古典タンゴに集中:ピクトル、ロムート、ファン・マグリオ、フレセド、フィルポ、ホセ・セルビディオ、アイエタ、マルクッチ、ファン・ギド、ボナバーナ、ロシータ・キログ等々。そしてほどなくして蓄音機の音に魅せられて、SPレコードの蒐集を始め、「Victorola J1-50」から名器「クレデンザ」を経験し、さらに“タンゴを聴くなら英国製のHMV163を”という島崎会長のアドバイスで念願のHMV163の蓄音機を入手して今回のSPレコードコンサートに至ったという事です。

会場の「巖本真理メモリアルホール」は綺麗な会場で音響が良く蓄音機の音とは思えない程に後ろの方まで音が良く届いている。床や壁が良質の木材を使用した音楽鑑賞に適したホールである。入場者数は60名ほどで、ほぼ満席。若い女性の方も目立っている。蓄音機のタンゴコンサートにしては珍しいほど多くの参会者で大盛会と言えよう。



勝原良太さん

第1部 日本タンゴアカデミー会員六人による二曲選

1. 勝原良太 (主催者、四日市)

NOSTALGIAS (郷愁)

フランシスコ・ロムート楽団 (1936年)

MI DOLOR (我が悩み)

カルロス・マルクッチ楽団 (1930年)

2. 松本外司 (金沢)

HILOS DE PLATA (銀の糸)

オルケスタ・ティピカ・ピクトル (1926年)

PATO (一文無し)

オルケスタ・ティピカ・ピクトル (1926年)

3. 陳 昌敬 (東京)

SENTIMIENTO MALEVO (憂鬱な伊達男)

ロシータ・キログ (歌) (1929年)

EL MONITO (小猿)

フリオ・デ・カロ楽団 (1928年)

4. 弓田綾子（市川）

PARA DOS（二人のために） オスバルド・プグリエーセ楽団（1952年）

ADIÓS ARGENTINA（さらばアルゼンチン） フランシスコ・カナロ楽団（1930年）

5. 宮本政樹（東京）

CUANDO LLORA EL CORAZÓN（心が泣く時）

ファン・マグリオ“パチョ”楽団（1929年）

LA CUMPARSITA（ラ・クンパルシータ）

クリオーージャ・アルヘンティーナ楽団（1926年）

6. 井上 潤（姫路）

TE ACONSEJO QUE ME OLVIDES（私の事は忘れて）

フランシスコ・ロムート楽団（1928年）

NO CANTES ESE TANGO（そのタンゴを唄うな）

フランシスコ・ロムート楽団（1937年）

第一回目のタンゴコンサートでそれほど馴染みのない方もいるという事で、勝原さんをはじめ、NTAの会員の皆さんはタンゴについても、曲についても非常に分かり易い丁寧なコメントで終始話をされ、選曲についても二曲という選択は難しいが、NTAの会員の方はさすがにいいレコードを厳選されております。蓄音機のタンゴというと1920年代から30年代にかけての第一期黄金時代のタンゴが中心になるのは当然の選択でしょう。

第2部 「針音を超えて、、、今も輝くタンゴの名盤」 NTA会長 島崎長次郎

I. ヨーロッパの哀愁を綴った勇士たち

1. ORACIÓN（祈り） フェリーセ・ベレキア楽団（1935年）

2. CE SOIR（今宵に思う） A. J. ベセンティ楽団（1938年）

3. SENSIBILITA DE ZINGARO（ジプシーの感傷）

ジョルジュ・ブーランジェ楽団（1938年）

II. 黄金時代を彩った名流たちの遺産

4. EL HUERFANO（孤児） ロベルト・フィルボ楽団（1922年）

5. ALFREDO（アルフレド） フランシスコ・カナロ楽団（1927年）

6. VENGANZA（復讐） ロシータ・キロガ（歌）（1926年）

7. VAGABUNDO（放浪人） アグスティン・マガルディ（歌）（1933年）

8. CANCIÓN DEL OLVIDO（忘却の歌） フリオ・デ・カロ楽団（1930年）

9. JULIENNE（フリエンネ） オルケスタ・ティピカ・ビクトル（1927年）

III. 20世紀後半のタンゴシーンを飾った4巨匠

10. QUEJAS DE BANDONEÓN（バンドネオンの嘆き）

アニバル・トロイロ楽団（1952年）

11. VIVIANI（ビビアーニ）

カルロス・ディ・サルリ楽団（1956年）

12. LA ÚLTIMA COPA (最後の杯) オスバルド・ブグリエーセ楽団 (1953年)
 13. LA CUMPARSITA (ラ・クンパルシータ) フアン・ダリエンソ楽団 (1951年)

いっつもながら島崎会長の弁舌さわやかで丁寧な分かりやすいコメントには感心します。しかも膨大なSPコレクションの中から選りすぐったものを蓄音機を通して聴けるのはありがたいものです。

今の時代はCDやDVDやインターネットでスイッチ一つで簡単にどんな音楽にでも接する事ができ、その便利さにどっぷり漬かっている時代である。それが片面たったの3分でその度に針を変えてゼンマイを巻かなければならない面倒さがあっても、なおも蓄音機の音に執着するのは何故であろうか？旧き良き時代の音楽の癒しを求める単なるノスタルジーだけではない。その柔らかい暖かみのある音、近くで生演奏を聴いているような臨場感、ほっと一息つくような心地良い充足感を与えてくれるのが蓄音機である。蓄音機やSPレコードを持っている人も少なからずいるが、一人で家で聴くよりも仲間達と一緒に聴いた方がより楽しさを与えてくれるものである。全国でも蓄音機によるタンゴコンサートも今ではかなり少なくなってきたが、今回「なごや蓄音機クラブ」を立ち上げたことは大変喜ばしい事であり、今後のますますの発展を切に望むものであります。

蓄音機によるSP鑑賞の後はすぐ近くの居酒屋での二次会に約半数の30名ほどの人たちが集まり、和気あいあいと非常に和やかな雰囲気の中で終える事になりました。レココンを含めてこれだけの人たちが来てくれたのも、島崎会長の強力なサポートだけではなく、勝原さんの熱意ある実行力と誠実なる人柄であろう。又、東京、横浜のレココンとは異なり、若い女性群が多かったのも勝原さんの人気の影響でもあろう。関西方面から何人かのNTA会員が駆け付けて盛り上げてくれたのも良かったと思います。

会場となった大黒屋ビルは1階が和菓子店兼喫茶店、今回は大黒屋製アルゼンチン銘菓「アルファフォーレス」を販売し、会場でも御馳走になりました。2階のギャラリーでは江戸の錦絵(風景画、戯画、美人画、役者絵等)の香津原浮世絵展示会を開催。勝原さんは「Tangolandia 2012年春号」で「タンゴと浮世絵」を執筆されておりますが、浮世絵販売の御商売をされております。1階でコーヒーを飲み、2階で浮世絵を鑑賞し、3階で蓄音機のタンゴを楽しむという3点セットになっております。個人的には来年も翌日の観光旅行も兼ねて是非この蓄音機コンサートには参加したいと思っております。



会場風景



集まったNTA会員

いずれも写真撮影は吉澤義郎さん

No hay otro Carlos Gardel (ガルテルがもう一人居るわけがない)

Letra : Alfredo Santos Bustamante

Música : Ángel Mazzola

俺は怒って悲しんでいる
 こんな話があるものが
 そんな原因^{わけ}で俺の心は
 苦い思いに満たされる
 誓って言うぞ 馬鹿げたことだ
 あんな話を真に受けるのは
 アルゼンチン人の風上には置けぬ
 そんな話を造った奴は
 俺に届いた馬鹿な話は
 もうひとりカルロス・ガルテルが
 居ると言う

ガルテルがもうひとりだと！
 糞喰らえ！
 何たる嫌みか 向こう見ずなのか
 面白くもなく根拠^{いわれ}も無くて
 洒落にもならん
 もしガルテルが現在生きてたら
 もしカルロスが死んでなかったら
 俺は迷わず断言するぞ
 真似をしている連中は
 今頃港でひしめき合って
 荷物担いでいるだろう

ガルテルは 慰めにもならんけど
 あんな賢い男だったんだ
 だから或る日契約を結んで
 天国へ歌いに行っちゃったんだ
 俺たち喪に服しているけど

安心しても居られるんだ
 何故ならあの威勢のいいモローチョは
 溢れんばかりの笑顔を見せて
 天国へ運んで行ったんだ
 我が下町のガウチョの歌を

小首かしげた鍔広帽子
 胸には白いハンカチ挿して
 そしたら権利があるものと
 あのモローチョを押しつける
 フランス風のパンタロン
 いとも易しく軽やかに
 ポスター観ながら真似するように
 考え違いをするじゃない
 たとえ千年経ったとしても
 ガルテルがもうひとり
 生まれはしないんだから

だから俺は怒ってるんだ
 このしょうもない作り話に
 縋りつきたい気持ちもあるが
 ぶっ壊してやるぞ俺は本気だ
 かなりの出来だとしても
 偽物ってのは嫌なんだ
 ガルテルに立ち合い人になって貰って
 俺の怒りが正しいことを
 お袋にかけて誓うぞ
 ガルテルがもう一人居るわけがない！

上記の太字部分が Tanguendo en Japón 第32号掲載の拙訳「カルロス・ガルテル」第3章の原文に引用されています。CD Jorge Vidal "Recordando Éxitos" EMI-DBN 7243 4 77594 2 0 は斎藤富士郎さんにご教示頂きました。原詩はLetra-Dに掲載されています。

日本タンゴ・アカデミーの行事予定

- ◎中部リンコン 日 時：11月10日（日）
会 場：「スワ・セントラル・パーキング」2Fホール
- ◎東京リンコン 日 時：11月19日（火）
会 場：「原宿クリスティー」
- ◎セミナー 日 時：11月23日（土）
会 場：「東医健保会館」
- ◎全国会員の集い 日 時：2014年3月9日（日）（第2日曜日になりました）
会 場：「メルパルク横浜」（会場が新しくなりました）

会 員 動 静

（2013年10月20日現在 195名）

入会者

鈴木慶子（東京都） 本間正行（東京都） 星野睦郎（東京都） 松崎久美子（東京都）
廣嶋紀通（神奈川県） 田中早苗（埼玉県） 寺本千栄子（千葉県） 勝原良太（三重県）

退会者

池上 格（東京都）逝去 大和田充昭（福島県）逝去 由利あつ（東京都）逝去
内田省三（千葉県） 田原陽次郎（千葉県） 手島泰子（千葉県） 細田満理（東京都）

次号の原稿締め切り日

Tanguendo en Japón（2014年1月発行）：2013年11月30日

Tangolandia 秋号（2014年4月発行）：2014年3月31日

編集後記

今号も多くの皆さまのご投稿を頂きました。新しくご参加頂いた方々や久々の登場の方々にも深謝申し上げます。図らずもダンスに関係した記事が集まりました。タンゴ関連行事も数多く行われ、その全てを報告することは出来ませんでした。東京近郊以外の地で行われる会員の皆さまの集まりのご報告（写真も）をお待ちしております。（大澤）

日本タンゴ・アカデミー副機関誌

「Tangolandia」(非売品) 第27号 2013年10月 発行

発 行：日本タンゴ・アカデミー

〒156-0044 東京都世田谷区赤堤2-32-14-104（飯塚方）
電話&FAX 03-3324-1989 E-mail iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編 集 部：大澤 寛（編集長）〒162-0051

東京都新宿区西早稲田2-1-23-609

TEL&FAX 03-3208-2247

E-mail hdomingo@bc4.so-net.ne.jp

島崎 長次郎・齋藤 富士郎・弓田 綾子・西川 薫

表紙デザイン：脇田 富水彦